柳川雅話 月刊

麻生路郎・主宰

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十五年十月一日發行 第十七卷第十號（毎月一回一日發行）

拾月號

201

Pensoj flugas trans la land-limon

第十七卷 第拾號

★最高權威の月刊柳誌

川柳雜誌 拾月號目次

表紙……（燈火）……福井哲
川柳寫眞……大西八歩・福井哲……（一）

★

内外時事……（一）
作家列車……麻生路郎……（一）
野球の父……古川風竹……（二）
ユーモアを探る
孫引と養子引……田島清……（七）
雲中語……寺井鋭々……（一〇）
都心隨筆……泉融々……（一二）
愚談……小畑自由朔……（一七）
「千草も」の句に就て……柴谷宰二郎……（一八）
武玉川四篇研究（二）……梅本塵山・森東魚・蛭子省二……（八）
ホノルル邦人の年中行事……前山北海……（二）
三十石そのほか……戸田孤篷……（二）
狸……（續）……前田五健……（一〇）
小刀鍛冶……蛭子省二……（一〇）
貝釦……岡田某人……（一四）
山川と一戰……古川魔花麗……（一五）
聖戰下新川柳のために叫ぶ……中原銃人記……（一八）
川柳とは？の會句報
二千六百年奉祝吟（路郎選）
部隊長（緑雨選）節米（鮎美選）
優曇華……西野みづほ……（一八）
「みちのく」を讀む……路郎生……（一八）

★

近作柳樽……麻生路郎選……（一四）
川柳塔……麻生路郎選……（一四）
同舟近詠……諸家……（一〇）
庭……水谷鮎美選……（一三）
一路集
ポスター……石曾根民郎選
各地柳壇……（一二）
柳界展望……（一六）
川・協……（一〇）
記……（一四）
後社會關係の人々……（一四）

★兵士は戰線に！ 我等は銃後に！

武田發賣品

胃酸過多症・胃痛に
鎮痛 制酸
ノルモザン錠

ノルモザン錠の治療作用は、服用後先づ胃の粘膜を被覆防護し、次ぎに分解して過剰胃酸を吸著し或は分泌腺を收斂して胃液の分泌を抑制するにあり。又本劑はロートエキスの配合により胃痛を緩解す

【主治効能】胃酸過多症、溜飲、胃痛、胃潰瘍、胃痙攣、便秘、悪酔、二日酔、飲み過ぎ等

（價格）一日分（一〇〇錠）三日分（三〇〇錠）一週間分（一〇〇）
一六日分（二〇〇）一ヶ月分（三〇〇）二ヶ月分（五〇〇）

發賣元 武田長兵衛商店 大阪市道修町

33(2)212

かすでじ存御
のルービヒサア
！味滋有含

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

天下靈場 高野山
天下絶勝 新和歌浦
黒潮躍る 白浜湯崎温泉
国立公園 瀞峡・潮岬
熊野めぐり 那智・勝浦

大阪難波の南海電車

昭和十五年七月廿七日第三種郵便物認可

勇退へ杖も淋しきもののうち　八歩

カメラ（福井　哲）

作家列車

――關西精動作家協會生まる――

一

關西在住の各分野の作家が大手前の府知事別館に集合して關西精動作家協會を結成した。これは新體制下に作家各自が持つ特技によつて、滅私奉公をしようではないかと云ふので出來上つた譯である。まだ海のものとも、山のものとも判らないが我々川柳人も其の席末を汚す事になつた。

二

大體、各分野の作家が斯うして一つの列車に乘り込んだ丈でも意義があるし、半井知事や伊塲總動員課長などが、目の廻はる忙しさの中から此の作家列車に同乘して同じ方向へ趁らふぢやないか、といふだけでも、舊習を打破し新體制らしい脈動がある。

三

はじめは何んだか、雲を摑むやうに、モヤモヤとしたところもあらうが、この列車は、これから枕木を並べ、レールを敷きながら、進む列車であることを意識してゐないと、全く意味のないものに墮してしまふ虞れがある。

四

要は滅私であるが、滅私の意味を、はき違へたり、鵜呑みにしないやうに各自の努力が必要である。大きな秩序が要求されるから滅私の必要があるので、滅私といふことは個の破壞や忘却を意味するものでないことは私が云ふまでもあるまい。この協會は先づ强靱な意思力と正確な明晰な原理を持つ機構の新味を持たねばならぬ。それから決めてかからねば一つの時間潰しに過ぎない結果を招來するだらうし、會の組織體である會員の上にグレシヤムの法則が發見されたら、それこそお終ひである。會員は度々集合して、案を練る必要があらう。會と精動課との連繫はされたし、何をすべき乎は出來上つたが如何にすべきかに就いてはまだ一つも論じられてはゐないここで會員の智囊の總動員が要求せられる譯だ。この列車に乘り込むことを以て自己の保身と心得てゐるやうな人々がありはしないか。ありとすれば、そんな人々から、新體制下に滅私奉公運動として發足した作家協會の會員資格者としての適正さに誘導することが事業を開始することよりも先決問題であらうと思ふ。

五

前述の如く各分野の作家列車の前途の多事多難なことは今から想像に難くないが、鐵路に支障を來せば會員自ら鶴嘴を擔げて鐵路の一工夫となつて目的遂行に邁進すべきである。今はそれほどの非常時なのである。よりよき發展を希求する。

★内外時事★

☆官吏間の形式的な慶弔を廢止、各省大臣以下不幸のあつた場合、花環、藥玉の寄贈、結婚式の榮轉祝の宴會などは一切廢止、しかし不幸の場合に供物料として現金の受贈は例外として許可、卅日通達即日實行（八月卅日）

★陸軍砲兵大尉北白川宮永久王殿下は九月四日作戰任務御遂行中蒙疆〇〇に於て飛行機事故により御戰死遊ばされた。

☆日本理容聯盟指導部が職時女性にふさはしい國策型淑髮を淑髮美容協會に考案させてゐたのが出來上り關係當局の諒解を得たのでポスターを作り十七日全國へ發送。

★新政治體制運動の名稱は大政翼贊運動と稱し會名は大政翼贊會と決定。

☆十月七日から煙草の高級品販賣中止、葉卷（グロリア、ペルフェクトス、イムペリアス）口つき（國華）兩切（コハク、扶桑、ホープ）刻み（水府）等。

★十月七日から十一日までの五日間全國的に「銃後奉公强化運動。」

☆日獨伊三國同盟成立（九月廿七日）

亞國練習艦「アルアナチン」の艦上で生徒候補と北海氏（一九四〇・六）

ホノルル邦人の年中行事

―ピクニック―

前山北海

ホノルル邦人社會の年中行事のピクニックは、今年は日布時事社主催の〆一日清遊汽車の旅々が其の魁であつた。夏の凉味を新鮮な野外に求める街の人へ風變りの汽車の旅は、廣告部長古川竹風氏の發案、寫眞部長古川章氏（自由律俳人文詩朗）が沿岸撮影地の檢分から準備を進め、忽ち街の話題となつて當日が鶴首して待たれた。

愈々當日の六月二十三日の日曜日は布哇晴れの絶好なピクニック日和、午前七時半出發と云ふに集合時間の一時間も前から繰込む七つ道具の大公望、キヤメラを肩にした寫眞ファン、家族總動員の一團、大仕掛の團體等でホノルル驛頭は時ならぬ混雜を極める。

大公望專用車四輛を含み十四輛の客車を連ねた汽車は勢よく發車、米國大艦隊の集結してゐる眞珠灣大軍港を車窓に眺めて進行する頃になると、印刷部長古川麗花麗氏考案のピクニック新聞が配付されて車内のあちこちに爆笑が起る。日本弦樂團武

都心隨筆

泉融々

○

パリから第二次歐洲戰亂の難をのがれて歸朝した畫家K君に十七年ぶりで見る祖國の印象についてたづねた。七月下旬のある日のことである。

「さうだね。眼についたものとしては若い婦人の洋裝だが、パリあたりでは明らかに氣狂ひでなければ着ないやうなものを平氣で着て歩いてゐるのが氣になるね。それから耳についたのは停車場のプラットフォオムでカラコロと鳴る下駄の音だ。」

「物資の不足を感じないかね。」

ときくと彼は言下に

「日本で不足してゐるのは物ではないよ。一ぱん不足してゐるのは『時』ではないだらうか。」

わたくしはK君のこの最後の言葉が久しくわたくしの頭を占めてゐたことを告白する。

○

K君が氣狂ひじみた洋裝の婦人を嘆いてから一ヶ月ばかりたつたころの東京はかなりその面貌を改めてしまつた。銀座でも劇場でも女の服裝はひどく地味になつた。

「少し行きすぎぢやないかな。」

Y君は淋しさうにいふ。

「殺風景が人の心をすませなければいゝけど。」

とT孃も趣味至上主義者である。

それはともかくとして東京がこの變貌をきたした原因としては市民の頼もしい自肅精神のほかに、興亞奉公日の街頭で贅澤と認定された人々にひそかに紙片を手渡す企てと、「ぜいたくは敵だ」「日本人なら贅澤はできないはずだ」などといふ立て看板とを數へるべきであらう。

人絹のワンピイスと下着（ズロオスとも）一さいをこめて金拾五圓也の服裝の職業婦人が紙片を渡されたといつて憤慨していつた。「渡した小母さんの方は地味とはいへ、どう踏んでも何百圓といふ御召づくめでせう。どうかと思ふわ。」君よ、しかし、憤慨する代りに喜びたまへ。あなたは生れながらに派手なのです。どんな安手の物を身につけても地味になりえない優秀品なのです。その人が來ただけであたりがぱつと明るくなるやうなあの特製にぞくする幸運の方なのです。あなたは小母さんの千慮の一失をゆるしてあげる權利を持つてゐるのです。小母さんの錯覺は嫉妬からではけつしてなく、あなたがあまりまぶしすぎるための眩惑からきてゐるとお思ひになる方がよくはないですか。どつちにでも解されることはなるべく善意に解しておいたほうがいゝでせう。

○

「自動車はぜいたく品ぢやねえと思ふんですがね、あつしは。」

と運ちやんがうそぶく。

メエタアがまだ三十錢を示してゐるのを見ながらわたくしが答へた。

「さうさ。少くとも君の車の場合にはね。バック・ミラアが半分缺けてゐたつて、むしろ時局型として誇つて然るべきだよ。」

「ですけどね。お客さんの眼にはあんまりつかねえでせうけど、あの立看板がいやつていふほど立つてるでせう。小學生がそれを見ながらこのオンボロ車を指さして『ホラ敵が來たぞ』といふぢやねえですか。すつかり腐つちやふよ。」

「そのために商賣が上つたりになるわけでなけりや、あんまり氣にしなさんな。」

「だがね、旦那。『敵だ』つてはうはまだいゝが、『日本人なら』つてほうは何だかひどく意地惡な書きかたぢやねえでせうかね。こちとらは誰がなんといつたつて日本人なんだがね。」

力を入れたその語尾にはぢかれるやうに、眼の前の名札を見ると「朴良允」とある。

「さうだとも。われわれは日本人以外のどこんにもなりえないんだ。」

内地生れだといふ朴君ははじめてにつこり笑つた。

○

東京人は見榮坊だといふ。そしてその見榮坊はやせ我慢と深くつながつてゐると思はれる。

そばに汁を少しつけて食べる。壽司に醬油をつけるかつけないかで口へ持つて行く。そば通や壽司通といはれる人々のそれには食物本來の持味を尊重する意義もあらうけれど、一般の東京人のはそれの單なる模倣にすぎない見榮坊でしかないであらう。

停車場で自分で持てる荷物でも赤帽に持たせる。そして規定の一個につき五錢の料金でいゝものを一個十錢以上をはづむ。これも同じくであらう。

やせ我慢からくるこの種の見榮坊だけはこの時局を好機として清算されていゝものではなからうか。

○

子供に「何故」と訊かれて「何故でも」と答へる大人の答は子供にたいする侮辱である。大人にもわからないことはある。だから「何故だかわからない」なら子供は滿足してひき下る。だがわかつてゐてもいはない場合が「何故でも」である。それは實は答になつてゐないのだ。だから「何故でも」にたいしては子供は根氣よく「何故さ」をくり返す。

大人は「何故でも」といふ無責

井輝氏の指揮で唱歌「汽車の旅」が合唱される。朗かな車内だ。

ワイパフの稲田から青い葉の波打つてゐる。蔗畑を過ぎ、海岸をまつしぐらに汽車は走る。カイナ岬手前に停車すると、釣竿を擔いだ大公望はどや〳〵と下車する。岩に波打つ海岸線を撮影して發車、岬を迂回して着いたのがホノルルから五十五哩のハレイワ海岸である。

汽車からどつと吐き出された老若男女の一行は、會場に行進してあちこちの椰子の木陰に陣取り、失業救濟工事として完成された運動公園には幾組かの軟球試合が行はれてゐる。向ふ海濱にはスコーフィルド兵營から來た數百人の兵士がのんびりと水泳に興じてゐる。近くのハレイワ・ホテルには水中の魚を眺める船底を硝子張りにした遊覽船が繫がれてゐる。

涼しい椰子の木陰で辨當が開かれる。卷壽司、稲荷壽司、寒天、燒肉、蒲鉾と云つた。前夜から又未明から起きて用意された御馳走である。野外で食べると辨當の味も又格別の甘さである。上戸黨は芳醇な布哇製日本酒、富士正宗はどうして水なんか割つた代物じやない。いきのいゝ鰹魚の刺身で冷やカップ呑みである。醸造元から寄贈された氷で冷した酒シャンペンのボロが酡られる。キリン・ビールの栓がぽん〳〵拔かれる。下戸はソーダ水にアイスクリームのお代りだ。

午後は餘興、奇術師ハット・マッキー君の手品、團體參加の滋賀縣人會と日布時事の軟球試合で賑ふ。再び汽車に搖られて歸る途中は車内で幸運券の抽籤で景品が授與される。

年中自動車を朝晩乘り廻してゐる私なんかホノルルへ來て八年振りに初めて汽車に乘つた。自動車を下駄代りにしてゐるホノルルの邦人には汽車のピクニックも珍らしい思ひ立ちであり參加者千名と云ふ大成功であつた。ホノルルへ着いた時は皆すつかり疲れてはゐても汽車の旅もいゝなあと大滿足であつた。

ピクニック何んにもせずに疲れて居

○

ピクニック季節は六月初旬から九月上旬迄とされてゐる。各團體で催す一年一回のピクニックも毎年の事なので、當事者は場所の選定から趣向に相當頭を惱まされる。大規模な點から呼び物の一つとされてゐる商工會議所のピクニックも、今年は日布時事の「一日清遊汽車の旅」が人氣に投じたので、譯もなく汽車旅行となり、ホノルルより二十七哩のナナクリ海濱が選定され、客車十六輛を連ねた參加者千餘と云ふ豪華版となつた。

布哇の邦人社會位團體の多い處もあるまいと思はれるが、職業團體は有らゆる職業にあり、同鄕人團體となるそれ〳〵縣人會、郡人會、村人會から同宇人會迄組織され、地方人會が又ホノルル市内の各地にあると云ふ風である。從つて一人でワイキキ地方人會、土木請負業組合から山口縣大島郡人會の會員になつてゐる樣な例は決して珍らしくない。

斯うした團體が殆んど例外ない位に年一回のピクニックを催す。會則に「本會は會員相互の親睦を圖る爲年一回家族的ピクニックを開催す」などちやんと規定してゐる團體すらある位である。

ピクニックの會場は、なるべく運搬の便のよい、餘り遠くない適當な場所と云ふ條件から、ホノルル郊外の景勝な海濱を選んで催される。斯うした海濱は大體公園となつてをり市郡政府の公園局が管理してピクニック向きの設備も施してゐる。ピクニック季節となると日曜毎に十組位の團體ピクニックの催される事は珍しくない。從つて適當な場所は早くから申込まぬと仲

（六頁の下段へ續く）

任な横着な言葉で子供の「何故」をつつぱなしてはいけない。その場合、何か具體的な答をすべきである。「何故でも」以外の言葉なら子供はうなづくのである。また「何故でも」と答へなければならない「何故」でつつこまれるやうな云ひ方（内容と形式）はつつしむべきである。子供が聞いてゐる大人同志の話において特にその注意が肝腎である。

○

眉をよせ顔をしかめることによつて自分を賢明らしく見せようとする人々はまつたく鼻もちならない。都會の女性——しかもインテリらしい若い女性——にそれが多いことはやりきれない。フルウツ・バアラアの四方から見とほしのテエブルなどには必ずさうした女性の一組が見いだされるであらう。

周圍の誰れもが視線をことさらにそらしてゐるのに御本人たちはたえず人々から注目されてゐるかのごとき錯覺におちいつてゐるのである。

若き女性たちよ。眉をのばしたまへ。顔も雜草と同じやうに自然のままが一ばん美しいことをさとりたまへ。

わたくしは都市美協會がこの問題をとり上げないことを不思議に思つてゐる。

○

さうとうに込んでゐる午後の市内電車に小學校の一年生と思はれる童女が乘り込んできた。學校歸りであらう。そのすぐあとから縞の着物に前垂掛の十三四の小僧さんがついて來る。いはずとしれたお伴である。童女が大柄で小僧さんが小柄ときてゐるので二人の背格好が餘り違はない。

紳士が一人席を立ちながら、「お嬢ちやん、おかけなさい」といふ。童女が蚊の鳴くやうな聲で「いいの」といひながら羞むやうに身をくねらせたのと同時に小僧さんが揉手をしながらいつた。

「旦那、どうもすみません。」

そして童女に「おかけなさいよ」といふ。

しかし一旦「いいの」といひ切つた手前、彼女はどうしてもかけようとしない。トタンである、小僧さんがソツポと向きながらニコリともせずに「チエツ遠慮をする柄じやねえや」とどなつたのは。車中に湧き起る善意の爆笑が童女をして顔を眞赤にせしめたことはもちろんである。

しかし小僧さんの屈托のない純眞さはむしろ童女に好感をこそ與へたらうと思はれる。

○

某大都市の大ホテルの朝の大食堂内である。わたくしのすぐ隣りのテエブルに五十恰好と思はれる一人の洋服紳士が席をしめた。頭の丸刈とチヨツキの太い銀鎖とに不調和なくらゐつぱな洋服である。ふと見るともなく見ると靴のかはりにスリツパをつつかけてゐる。ホテルの人がどうして咎めなかつたらうか。

女給さんがくる。型のごとくコツプにアイス・ウヲオタアを注ぎながら、

「なにをさしあげます」といふと

紳士は言葉すくなに

「朝めしくれ」と答へる。

「ア・ラ・カルトになつてをりますから」と女給さんがメニユウを押しすすめるやうにしたときに、明からに當惑の色が紳士の顔をくもらせた。紳士はあたりを見廻す。ちやうどオオト・ミイルを終へたわたくしのテエブルにオムレツが運ばれたのを彼は見のがさなかつた。

「オムレツくれ」

「オムレツはなににいたしませうか。プレイン、チイズ、トマト、パセリ、アスパラガスといろいろになつてをりますが」

「普通のでいいや」

「プレイン・オムレツでございますか。あとトオストでもおもちいたしますか」

紳士は手を横にふる。

「コオヒイでも」

「ああ、コオヒイたのむ。それからパンをくれ、燒いたのを」

このとき女給さんは不らちにも輕く吹きだしてしまつた。さいはいに汗をふいてゐた紳士にそれが氣づかれずにすんだのにわたくしはホツとした。

やがてオムレツがくる。女給さんがトオストをならべてゐるとき紳士はオムレツにナイフを入れながら叫んだものである。

「君、なかになにも入つてゐないぢやないか」

「でもプレイン・オムレツとおつしやいましたから」

紳士は明らかに不快の色をあらはしてだまつてしまつた。

わたくしは女給さんに反感を覺えないわけにはいかなかつた。一度は泊つて見たいとあこがれてゐたホテルにはじめて泊つた善良な紳士をかうまで辱しめなければ氣がすまないのであらうか。

かの女給さんだつてホテル勤めをしなかつたら、はたしてトオストをそしてブレインの意味を知つてゐたであらうか。「ア・ラ・カルト」といふ語を時に應じては「一品」といふわかりやすい語で置きかへるすべを敎へこまない支配人にも責任があるかもしれない。

知らない人に罪はない。知らせない人々に罪がある。わたくしは紳士のスリツパをつとめて見ないやうにしながら食事を終へた。

○

孟子はリアリストである。三遷を敎へた母親からその血をうけたのであらうか。老子はアナアキストである。莊子はしかし明らかにロマンチシストではなからうか。

孔子だけは一とくちではいへないやうな氣がする。案外複雜な人間だつたのではないだらうか。皮肉にいへば十五までは怠けもので、三十までは迷ひどうしで、四十まではあまのじやくであつたとも見られよう。理想家らしくもありながら現實的なところがあり、公平を理念としながら、人にたいする好き嫌ひがある。偏食もしたらしく思はれるし、怒りつぽかつたこともありさうだ。

だがそれだけに孔子の言葉が一ばん身にしみるのではないか。そんな氣がするのはわたくしだけであらうか。

（十七、八、二十六）

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎日 午前
内科
醫學博士 佐多愛彥 北区 8 31
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電話 151
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

川柳塔

‖路郎選‖

買出しの列も問屋を起して居　大阪　橋本綠雨

千圓の金に爭ひ續けられ

事務服でしるこ屋へ來る女連れ

商品が少なくなつた列ぴやう

朗舟氏令息を悼む

子を死なし無情の風とあきらめず　兵庫縣　奥村丹路

眦(まなじり)に弱い人間樣が住み

おそろしや紙屑籠が口を開(あ)け

ライスカレーを頰ばりすでに夢をみず

もつと靜にし給へ電氣蓄音器

私益とや低きに堪ゆる屋根の海

混凝土の固さに或る日氣付くなり

事務の暇ものがなしくも歌をよみ

巴里陷落に寄す(三句)

過去完了のなつかしさ巴里の屋根の下

憎めぬ國ふらんす嗣治髪を切る

巴里陷つそれもとらんぷ譚(ものがたり)

この男に缺けてゐるもの精神か

H君へ

ひとり身の女嫌ひとは言はず

考へる動物電車疾走す　張家口　岩崎柳路

町醫者の排斥もした座談會

親且那下女のかたもつ日もあらん

耳搔へ顔をしかめた長襦袢

撥胼胝へ前借聞けば二千圓

魚の目なぞ切らし妾宅恙なし

張家口居留民團議場風景(三句)

釋明の助役自若と眼鏡越し

御參考までにと述べて異議はなし

へボ議員尙早論を繰り返し　兵庫縣　寺井鋭々

禪をやり茶をやつてゐて氣短かな

モンペはいた事も藝者は話とし

落ちてゐる釘を拾ふもくらし也　大阪　大西八歩

秋風の中抱き上げる子の溫み

歸還兵故鄕の心となる芒

國民歌父より先を子が唄ひ

洋裁を習ふ氣になるバーの秋

辯じ終りて風の如く去り

性は善なり居眠りをしてるなり

儲けてる話へ動くのぞ佛

七・七令へちと仰山な笑ひ樣

長野善光寺へ母を伴ふ

珠數掛けた手へ持ち替へるそばの箸　布哇　高澤一浪

金持のこの頃痛いことばかり

心配は要らぬ色氣はきつと出る

金が何、千萬人も我行かん

兄弟が思ひ〳〵に宵を出る

素顏より惡いと仲人出す寫眞

裁いては不可裁けるものじやない

戀人の芳紀五十に手がとゞき

君命を奉じ一度で罪な母

一代の名士女將の智慧を借り

好きな妓があるかと好きな妓が尋ね

だまさるゝ男も少し嘘をつき　大阪　戸田孤筌

ワンピースお守さんをさげてゐる

警報の中で木魚がなりつゞけ

刑務所も天國である女囚の兒

新らしい正義と商人功罪史

病み上りバスを一台やりすごし

燈管の御蔭で天の川が見え

ラッシュです朝ですバッタ、イナゴども

妹にうらしてもみる夕刊屋

女事務ガラスのダイヤまだすてず　大阪　中島生々庵

旅に見るこの人の暮し氣にかゝり

お土産を末の子寢ぬ間と急いでる

臨終が俺の場合をふと思ひ　兵庫縣川西町　戸倉普天

洋裝は褪せて嫁にも行かね事務

口紅の娘の親の下駄は耗(も)び

娘の自慢してゐる内に嫁き後れ

儲けたを自慢に稅の事を言ひ

闇で儲け闇で損して非を悟り

喜んで退(ひ)く辭表にも手が震ひ　福知山　小畑自由朗

お盆

生き殘る膝の伴に鐘打たせ

靈あらば位牌二ッだけ物を云へ

いそ〳〵とお寺は精進料理する

犬の分ついでにお寺賴まれる

經二分話一分盆の寺　布哇　古川風竹

西瓜の核(み)器用に割るが支那土產

平凡は大過なくして任を去り

職工の汗が火と噴く夜の煙突

總領事が譽めて見直す海の色

八人目愛兒なぞとは言つてゐず

謠曲を目出度いものと二世聞き

連鎖店布哇土產も日本製

米兵の土產に買ふた長きせる　ホノルル　前山北海

ツーリストグラスハウスの無い不平
ワイキキの日本へ續く海へ佇つ

★

廣島　濱田久米雄

病人の椅子をゆさぶる女の子
病人の眼の中を行く救急車
奉公日グラフ箒と塵取りと
故郷へ病狀みんなまで書けず

大阪　魚住滿潮

一萬圓それから頭腦變になり
池の鯉に麩をやる丈に雇はれる
利殖法あゝこの人もお仕舞だ
社長室やせる藥の話なぞ
芦屋まで社長の畫寢起しに來
姑の不幸は耳がまだ聞こえ
後家さんを探す時間もこさえこき
遺言もなくリタ嬢は死んでゆき
興亞の青年疊一帖ようさはず
わからず屋の父を持つてるバスガール
一石六厘水の有難味を知らず
ランドセルこの兒にかゝる積りなり
朝のコーラス榮養不良の兒の叫び
相乘は御免第一日曜日
東京の何處に居るこも書いてゐず

大阪　清水史路

雨に風告別式も彼らしく
秋風へ四十九じやものちこ慌はて
雲ながれず地は茫々こ軍事便
肘付いて銃後を說けり師はつゝが
案山子立てり後ろを頼むこも言はず
煤の降る社宅の茄子は花茄子か
歸還兵言へば言ひたい口を持ち
眠むきものに倫理數學金魚賣り
翼贊へ隣り組から素ッ裸
籐椅子を立ちてあの灯が生駒です
轉業のヘイヘイヘイこ髭があり

執拗なまだ外米にこだはる氣
銃後說く師に頬杖の癖があり
パン店にパン屑もなく天高し

大阪　西川愁水

ウィークデー課長こ同じ宿で合ひ
体裁をかまはぬ主婦の子澤山
燒香へ在りし日しのぶ松葉杖

大阪　中内翠芳

氣に喰はぬ道頓堀の水の色
北支から歸へつた友に髭が有り

下關　多田市多樓

浪花節人家離れた聲になり
來る日も來る日も喰ふ算段ばかり
馬鹿の子を褒めて掛取り如才なし
まだ女性めざめぬ眉を引いてゐる
軍曹が來て射的屋が言ひ負けた

下關　濱田賢次

夕立ちにボン〳〵船も畫の如し
小休止此所をせんごこいびきかき
かきこがめられる物一ッ無き吾暮し

大阪　森宗男

野菜サラダの中から青いものを撰り
洗ひ髪過去の埃は洗へまい
靴下のない行軍を君知るや
くしやみまたそろばん崩れそうになり
秋の雲寢射の姿でカメラ持ち

ビリヤードにて(二句)

すばらしいフロックビールのゲッブが出
二三球はまだ商用の中に突き

廣島　大森風來子

滿月へ大學を出て幾年ぞ

妻のふるさと(二句)

墓まゐり木魚聞こゆるのがうれし
驛までの道に蝗がこんでくる

車中吟

過去、現在、未來—夜汽車の假睡
靈峰を拜む片手の新聞紙

兵庫縣　水谷鮎美

歌舞伎座觀劇(九月八日)

「かすみの城」一幕

忠臣はこの城内で死に易し
諫言の眞上の城が燃えはぢめ

「大森彦七」一幕

魂をおふは馬上の彦七よ

「夢の井戸」一幕

再會の妻は尼僧こなりし秋
草稿すてる娘のまほろしが井戸に消え

德島縣穴吹町　姫田夕鐘

二十貫の女の前へちよこなんこ座り
見た樣な顏舊友の和尚さん
御靈前こ書き幻へ眼をつむり
生薑糖讃岐の匂ひさして着き

大阪府柏原町　宮岡白峰

友の戰死

春の野へ煙は消えたまゝなりし

陸軍病院にて

更生の朝を笑つた松葉杖

二百十日

外米は矢張り續く聲明書
滿潮の大阪港の波の色

防空訓練

防火班だけのバケッかなこ笑ひ

大阪　中西おさむ

きつこ落ちたこ母に思はせ雷雨する
出世せぬ男が二人立話
スケッチブックにヒットラーの髭畫いて見る
自轉車の喧嘩自轉車脇へよせ
卷煙草女はマッチふいて消し
妻はウキンド見てゐる夫はそれを見てゐる

大阪　正本水客

氣詰りな家から傘を借りてくる

落魄の一家きれいな姉妹
燈籠の倒れたるあり月まるし

民族の祭典

國歌湧くこころ民族の旗あがる
女文字さはがれる程のこゝでなし

豊中　黒川紫香

妾宅へ呼ぶは別個な金儲
節米へ遠慮會釋もなく肥り
お月見へ父を挾んだ子がふたり
朝顔が官舎の塀を越えてくる
肩書もつかず停年きてしまひ

大阪　丸尾潮花

死にに行く人もあろふに特急車
金借りに來たを女中も知つてゐる
公傷は陽の有る門をくぐり抜け
噂、自殺、處女の惱みの美しき
夕立へ氣安う軒を貸してくれ
本當の話なぎさへ出てしまひ
母こ娘の暮しへ寄附が廻つて來
好きでない人から貰ろたコンパクト
フグ釣つて戻る漁舟へ時雨て來
半處女だ非處女だバーの灯が明し
バーマネント罪の子供がもう二十歳
働く身下駄のちびたも氣にかけず
それ程の戀へ二人は何故死なぬ
バージンよなぞこ妓は笑はせる
うつむけになつて病床鶴を折り

大阪　岡田某人

郵便受のつめたさも秋
秋ですなあこゝゆつくりこ云ふ
こんにやく版野球をするこ云うて來る
算盤の名手こきこえボカンこ居
老友こ薄陽の濱へしやがみに來
貨車一輛夕陽へこり殘されて秋

尼崎　酒井斗風

高踏的な顔して泡盛呑んでゐる
去つた地の景氣十年前おもふ
脂ぎる顔が職場を守つてゐ
代用食默々こして箒持つ

大阪　北川春巣

防空演習

ガスマスクにかびの生えてる國に住み
留置場から友情の瞳を思ひ
配給の酒を聟殿飲みに來る
丈高き惱みを女話し合ひ
未亡人ポスターを貼る壁を貸し
女文字の投書を署長讀んで見る

下關　櫻川不水

葱坊主ちよん〳〵切れば切れば こて
或時は妻のしぐさの處女じみて
體當りして見て組し易しこす
明快に嘘つく男少し禿げ
小判でも產ますか子等の鶏を飼ひ
花一つあの赤貧の底で咲き

大阪　田中風葉

噂もう否定もせずに書く辭表
月見草なぞこ歌詠む娘こなりて
居候笑ろても暗い顔になり
女から道を聞かれて居る夜釣り

麻生路郎著
新川柳評釋
定價八拾錢
送料六錢
堺市出島海岸通二丁一八二
發行所　不朽洞出版部
振替大阪三〇三九二番

（三頁の上段の續き）

々公園局から借りられぬ。手廻しのいゝのになると二月位前から豫約して置くのさへある位である。數臺の大型バスを借切つたり、自家用車數十臺で會場へ繰込む團體のピクニックは仲々豪勢なものである。

アラモアナ海濱にはピクニック用に會場を賃貸する料亭がある。時として個人所有の海濱別莊が選ばれる場合もある。米人の商社や耕地會社では週末泊りがけに行つたり、ピクニックを催したるし得る設備をした海濱を所有して、從業員に提供してゐるのもある。

同鄕人のピクニック。日曜日に車を驅つて海濱を廻ると、「××郡人會ピクニック會場」「〇〇地方會遠遊會場」など書いたビラが入口に貼つてある。時には新潟縣人會に福島縣人會が隣合つて仲よくピクニックを催してゐたりする微笑しい風景を見る。

よく働いてよく遊ぶをモットーに邦人は週日は一生懸命働いて日曜日のピクニックを樂しんでゐる。邦人社會のピクニックは又社交的行事として年々盛んになつて行く。

ピクニツク塊毎の國訛

ツクをんかになると、誰にも遠慮氣兼が要らぬので、お國訛りを丸出しにして打解けてゐる、とても朗かな風景が見受けられ

淑髮ウエーヴは
大阪・心齋橋筋周防町角
ナショナルへ
子倫營
口經
山
南992電

愚談

小畑自由朗

叫聲

夜半――時ならぬ叫聲に、近所の人が吃驚して駈けつけて見ると警察の旦那夫婦が大いにもめて居るのであつた。而も、兼々附近の人達から畏敬されて居る金筋人りの旦那の夫婦喧嘩だつた。「やつぱりあんな人でもやるんだんな」と誰れも仲裁に這入ろうとはしなかつた。

血の道の原因

兒が三人、「わたしが死んだらあんたどうしなはる」と、女房が云つた。

亭主は答へた「そらお前、又十七八の人もらうがな」

と、それからだつた、女房に血の道が起て、はりとやいとに大分金を使はさゝれたのは。

人情

山から石を掘り出すのが私の商賣である、扱う品は至極固い物だが働いてくれる人達は至極固くない奴ばかりなので眞に扱ひにくひ。それで私は尤も安上りの人情味をもつて此れ等の連中をあやつることにして居る。

或日も又一人の工夫さんが何んとかかとか文句を竝べ立てゝ金をせびりに來た、そこで私は又、不本意乍も不得止、毎時もの様に「働かざる者は食う不可」とソ聯の金言を先づ引用し、而して、「兵隊さんのことを思へ」と非常時國民の自覺をうながし而して尙「お前にも國元には親もあうろが兒もあろうが、そんなことでどうするのぢや」と、責め道具よろしく、金を出そまい必死の熱誠で、相手をほろりとさしたまではよかつたが、工夫さんが目に一杯泪を溜めて云うことには「よくわかりました大將よ、明日から心を入れ更へて働きます、嬶はないから兒はないが、國元には歳老ひた兩親が、淋しく暮して居ることをひよいと思ひ出してたまらなくなつて參りました、ついては何か急に送つてやりたくなりました」と、あにはからんや、呑みしろ以上をしてやられた。

月下氷人

之れも又工夫さんの話、此の工夫さんは仲人が何よりの道樂で、今のところ約百組を造り上げて居る、而し、此の百組が年中ごて〳〵して居るので此の仲裁になか〳〵いそがしい、と云つても此の仲裁の方法が至極簡單で、「俺の仲人で氣に入らにやたつた今別れろ」と夫婦を交々ポカ〳〵と毆るだけなんだから雜作はない、而し、彼が述懷して曰くには「もめるのも實のところは無理もないのぢや、なんとなれば、どいつもこいつももらひ手のない奴を、來てのない奴に、無理に喰つけたんぢやから喃」

肥え壺の怪

これも又々工夫さんの話、何日もの様に、あちらこちらと呑み歩いた末、夜の十二時頃にやうやく自分の家の近くまでたどりついて、大聲で何やら喚きちらす聲に、近所の人は夢破られて又かと顏をしかめて舌打ちを仕乍、やうやく夜を明かして、寐不足な目をこすり乍ら田圃へ出て行く道すがら、ひよいと肥え壺を見ると、昨夜安眠を妨害した彼の工夫さんが、壺一杯に溺死體と成つて浮かんで居た。

一人息子

私の一人息子は當年八歳である、親に似て學問が大嫌ひで、お醫者さんに虛弱の證明をもらつたのを幸に、今尙幼稚園に通つて居る、來年もさ來年も、本人は永久に幼稚園に通うつもりで居るから私は心配だ、「でもお前、お父つつあんの様に顏にもぢや〳〵髭が生えかけてもまだ幼稚園へ行く氣か」と案じると、「その時はピンと八字髭を生やして先生になる」と。

魚釣

「なにしろ、儂しの魚釣りは助手を連れて行かんと一人ではいそがしいでな」と、自轉車の尻にオバハンを積んで、近所のオッサンが早朝からさつ爽として出駈けて行つた。其の夕方、ギイ〳〵と重さうにペタルを踏んで歸つて來たので、大いに期待して居た近所の人は早速ビクを覗きに集つた、だが以外にもビクは空つぽだ、オッサンは撫然として云つた「やつぱり女みたいなもん連れて行つたらあきまへんわ」オバハンは云つた「ほかの人はみんなやう釣りはりましてな、安うしといたるでと云うてくれはりましたんやけどな」「成程」と近所の人達が笑つた、トタンに、オッサンの片手がオバハンの片頬へスッとんだ。

疲勞の因

私はオンのテリヤを一匹飼つて居る。メンのゐる家からのしよへいでなか〳〵いそがわしい。或る日「やう歩きまへんので」と、しよへい主が抱いて來て云うことには「すまんことをしました。なにしろあんた、うちの奴が六貫目からもある猪犬だしたんでな」

早計

メンがたしかに身籠つたと見て取つた私は、早速オンタの山羊を座ぶとんにして仕舞つたのである。ところうがあに計らんや、メンタの腹は空つぽである。メンタは週期的にメエーン〳〵と鳴きわめいて近所の苦情の種と成つて居る。私は座ぶとんに成つて仕舞つたオンタを撫でて感慨無量である。

フロヤを探る ⑤

孫引と養子引

田島清

他人の引用文を拜借して、渉獵の廣さを衒ふのを孫引と云ふ。ところが、引用文には誤植と云ふ惡意のない惡戲者が潜んでゐて、時には衒學者を意外な陷穽に突落すことがある。或る學者と語つてさうした孫引嘲笑談に及んだ時、私はフトロを辷らせた。

「僕は孫引はやらぬが、養子引をやる」

「養子引とは？」

學者の質問は甚だ熱心である。私は心持顏を赤らめながら答へた。

「養子引とは、孫引同様に、他人の引用文に教へられるのだが、用心深く原典にあたつてみて、先づ誤植の有無を調べ、序跋、目次等を覗いて、その書誌的大要を飲み込み、バラバラとめくつて、あはよくば他の適切な引用文を拾おうとするのだ。養子引たる理由は、原典と僕との間に血肉のつながりがないからだよ」

すると學者は、意外にも私を輕蔑しないで、

「それなら、我々の仲間でも甚だ度々ある事實だ。だから、今時の學者は、自分の書いたものでも、二三年もすれば忘れてしまふ。もともと養子の材料なんだからから、頭が幾つも揃へば、見覺え難くなるものだよ」

筆者　堺市立堺圖書館長・詩人

優曇華

西野みづほ

僕の家の隣に實直な洗濯屋さんが住んで居ります。或日何時も使つてゐるバケツに珍しくも優雲華が咲きました。この花が咲くと昔から大變好い事か大變な凶事が訪れると云ひ傳へられてゐるそうです。洗濯屋さん夫婦の心配は想像以上で日頃信仰する天理様へ日參するやら大騒ぎです。

迷信と嗤へぬ白い花が咲き
吉運に變じ給へや天理王

それから四五日經つた舊盆の早朝でした。洗濯屋さん何處からか自轉車で歸つて來ました。そして曰く、今朝方驛前に〇圓札が澤山落ちてた夢を見たんです。優雲華の一件があるのでテッキリ正夢と睡いのに飛起きて行つたんですが紙屑一つ落ちてませんでした、とは笑へぬナンセンスです。

札束の夢にペタルの輕い事
無駄足と判り一度に睡くなり
正夢にあらずやつぱり夢は夢

（一五、八、二〇）

武玉川四編研究（十一）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

(263) **溜るとは小判を殺す道理也**

東魚＝ためると讀むべきであらう。守錢奴の死藏を輕くなぶつた心持。

塵山＝生きた錢とも云ふ故、殺す小判と云ふのも有るのである。

省二＝家に有つた小判は、小兒の時に手にした事はあるが、實際に取扱つた事のない私に於ても、句意は味到し得る。

(264) **腹のたつ時はやたらに蚊屋を釣**

省二＝腹の立つ時に、やたらに帶を〆めると云ふ句があつた。だから『しまり過ぎたる腹立の帶』（武17）などと詠まる。が、寧ろ蚊帳でも釣つてしまつて、寢ころんだ方が氣休まりにならう。然し隨分亂暴に蚊帳を取扱ふ事であらう。『惱氣の蚊屋をあてかつて釣』（武15）。

東魚＝やたらに云々は腹の立つまゝに、高く釣上げ釣上げするさまであらう。面白い捉え處と思ふ。

塵山＝「やたら」といふと、蚊屋を度々釣るとも聞えるが、是れは無闇の意であらう。

(265) **我思ひせめて樂屋を通る也**

東魚＝最負役者の部屋などを、うかゞひ通るのであらう。

塵山＝「せめて」の三字が適切。

省二＝今日にも通用する句。

(266) **無言て猪牙の通る水門**

省二＝猪牙なればこそ、無言で通りすぎる。どこの水門か。

東魚＝水門の前を通る。川に沿つた屋敷の池の吐口の水門であらうか。

塵山＝江東の御藏橋の所に、水門が有つたのではない歟。

(267) **這ふ子見て居る四月朔日**

東魚＝衣類が輕くなつたので、一層きび〳〵這ひ廻つてゐる。

塵山＝贊成。

省二＝『年間へば片手を出すや更衣』（一茶）『ひやりと居る四月朔日』（武18）。

(268) **蕁菜の切口清き秋の風**

省二＝食膳にのる蕁菜は夏季のもの、十月漸く粗硬であるから、切口清しだ。

東魚＝清い古い池の趣が想像される。

塵山＝蓮根の切口とは異なり、蕁菜の切口を云々したのであらう歟。

(269) **わつかな慾にまよふ寶引**

東魚＝當つても外れても、大問題ではないが、矢張りさて當りたいと、引き迷ふ處に興味もあるわけである。

塵山＝昔の乳母子守も、此の些細の慾に引掛つたのである。

省二＝『さゞざいが出すのをお乳母ねらつてゐ』で、續飛鳥川に、「辻寶引、辻に立、手遊びゐる色々かざり、寶引繩百本手に持て、さゞざい〳〵といふ。」外骨翁御自慢の名著「賭博史」には挿圖もある。（三篇『寶引繩の表奉公』の句釋參照）

(270) **献立は雨に喰れて大欠ひ**

省二＝雨に祟られた花見。『引窓をしめて辨當を内でくひ。』

東魚＝「雨に喰はれて」と云ふ、現はし方が面白い。前說の通り花見のはづれたのである。

塵山＝春日遲々。

(271) **朝貌の隣へミんな惚て行**

東魚＝朝顏の前に、まだ美しいものがありさうな氣がする。

塵山＝五條あたりの夕顏の宿は、その好い例と云へる。

省二＝御尤。垣根作り。

(272) **四十へ飛ふははやい一年**

省二＝四十は初老だ。人生五十とすれば、考へさせられる年丈けに、此一年の早さに感慨無量。――私はぼんやり迎へてしまつたが。『十九に成て近い一年』（武18）。

東魚＝全くかういふ感じがされる。三十代でなくなると、やはり、吾乍ら年をとつたと俄に思はれる――早い一年はさうした心持ちをよく現はしてゐる。

塵山＝來年（昭和十六年）は、八十に飛ぶ自分も、光陰は速いものと思つて居る。

(273) **隱し課せた夜着の書出し**

東魚＝遊女に布團を作つてやつたのだらう。

塵山＝錦の夜着を作るとも、後に襤褸を出すこと勿れ。

省二＝『夜着一つ布團三つをねだるなり。』ねだられた、やみつきの客の仕業。

(274) **眞ン中くほむ鉦の光陰**

省二＝敲鉦の眞ン中が、くぼむ程の歲月を憶へば、感なきにあらず。後生願ひも並大抵でない。「鉦の光陰」なるかな。

東魚＝「鉦の光陰」は面白い表現と思ふ。

塵山＝昔の作者等が、奇拔なことを云ふには、感心させられる。

(275) **柄杓へ投る人も參宮**

省二＝どうしても一生に一度は、お伊勢參りをせねばならぬ。そこで拔參が行はれた。『拔參人のなさけを汲んでゆき』で、一本の柄杓はなくてならぬもの、『一本の柄杓が參る有難さ。』柄杓へ錢を入れてやる人も亦參宮。

東魚＝長閑な和やかな趣がみえる。

塵山＝拔參りに柄杓は必要の道具であるが、これに錢を入れるのは、普通の參宮道者である。

(276) **行春の限りしられて乾頭鱠**

省二＝鮭や鯨等の頭蓋骨を刻むで膾としたものを、ヒヅナマスと云ふ。そを味賞し得た春も、今や逝かむとす。惜春の情。

東魚＝春暮れる情緒を味ひ得た事であらう――乾頭膾に、と云ふ意で、乾頭鱠は俳諧の季題になつてゐる。

塵山＝晩春に乾鮭を食ひ盡して、その頭骨のみ殘つてゐるのを膾に造るのは、事實にありさうである。

(277) **姿もつれて老にけらしな**

省二＝例へば旅行の折など、一層、老にけらしなの感じが深からう。

東魚＝連行する意でなく、共々に姿も老ゆ

るとの意と思ふ。「老にけらしな」は、古歌の調をそのまゝ措いた働きである。

麈山＝賛成で「つれて」は旅行などに連れるのではなく、相共にの意である。

省二＝爾氏のお説通りと思ふ。私の感じたのは、勿論共々に老ゆるのであるが、それが旅に出れば、一層老ひを思ふ折りが多い。旅愁も手傳つて。先般私は別府温泉へ行つて、自らの白髪になつた老軀を、つく〴〵と眺めたのであつた。

(278) **乳母の口から鶯といふ中**

省二＝語る乳母が、いかにも嬉れしさうだ。乳母だから「鶯」などといふ言葉にも、いや味が附きまとはぬ。

東魚＝親にも劣らぬ喜びをする乳母、前説の通り。

麈山＝新婚の男女をさして云ふの歟。

(279) **前鬼か妻も人殺しなり**

省二＝役小角には赤眼黄口なる、夫婦の鬼が仕へてゐた。邪悪の心深く、色々の罪を侵したが、咒を授けられて改まる。夫を前鬼といひ、妻を後鬼といふ。

東魚＝この句など前句關係で、特に面白いのであらう。

麈山＝後鬼の殺人と云ふ事は、傳説にも無いやうに思ふが、詳細のことは判らぬ。

省二＝前鬼後鬼傳説は諸説あつて、さだからず。前鬼及び後鬼といふ山民で、髪も髭も生した異類のことだとも云ふ。

(280) **尾長鳥窓にもたれて振藥**

省二＝雨は降る。淋しく窓側に倚つて、振藥を服む。(尾長鳥に就ては前篇『雨乞に力を添へる尾長鳥』に陳べた。)

東魚＝尾長鳥が啼くと雨が降る。尾長鳥と雨との關係は、嘗て「柳樽研究」誌に書いた。振藥は煎じ振出した藥の意であらうか。

麈山＝陰鬱なる天氣に、血の道などが起り、窓に倚つて煎藥を服むのである。

(281) **高野聖の晴れた大口**

東魚＝大口は卑猥な事を云ふ事に用ゐられてゐる。黄表紙、鼻下長物語に、「馬のまたに藥一本〳〵〳〵……ひよつと言ひそこなふと大口だ」と云ふ件りがある。高野から出て來た僧が、かけかまひ無く、卑猥な事を云ふ場合か、どうも十分解し得ない。

麈山＝昔の高野聖には清僧が尠くて、食はせ者が多く有つたらしい故、隨分大口もきいたであらう。

省二＝大口は猥褻な話をする事、自慢話をする事。故に、どちらも、あてはまる氣がするが、高野聖に宿貸すな、娘とられて恥かくなで、悪僧が多かつた。してみると猥談をやる方にとれる。

(282) **鞍うち行衛もしらぬ口を吸**

省二＝戀の道かなだ。——『小皷に戀を仕まける大づゝみ』などとあり、鞍打は、その方面にはあてたものらしい。

東魚＝目當も行末も分らぬ、其場ばかりの戀をするとの意であらうか。醫人に有勝ちな戀の趣であらうか。

麈山＝衆道の句かと思はれる。

(283) **瘧あけくの青い明ほの**

東魚＝「青い明ほの」と云ふのは、ほんの明けそめる其の未明の心持ちであらう。短夜を分けて瘧に惱んだ有樣が思はれ、明け近くやつと落付いた樣子が想像出來る。

麈山＝長く病褥に臥した瘧が、漸く快癒した時の心地は、黎明の晴れ渡つた、青空を仰ぎ見るやうである、と云ふのかと思ふ。

省二＝おこりの長患ひもある、が『一日はねても居られぬ童病』で、瘧の發作がとまつた後を、「あけく」と云つたのではなからうか。すると東魚氏説の如く、明け近くに歇むだ事とならう。『瘧あげくの損をした貌』(武初)

(284) **おもしろい戀かいつしか凄く成**

省二＝戀は甘い面白いものであるが、段々深入りして、餘りに眞劍になつてくると、命がけと成り凄くもなる。

東魚＝浮氣心から、眞劍になる恐ろしさである。

麈山＝君子は危きに近よらずである。

(285) **よい事に追へられては酒に醉**

東魚＝次き〳〵祝賀事があつて、それに追はれる樣な、酒宴の日が續くのであらう。誠に羨望な事呵々。

麈山＝中七、追はへられてゞあるが、それが不明である。

省二＝追つてくる樣に續く意で、東魚氏説通りと思ふ。

(286) **女をひとり遣ふ桑門**

省二＝二人も三人も遣つてゐたらヘンなもの。一人位ゐなくては不自由だらう。

東魚＝一人だけでは、尚ほ變な場合もあらうが、何か幼い者でも遣つてゐるやうな風に考へられもする。

麈山＝只女といふ名ばかりの、老婆に雜用をさせるのである。

(287) **青田に惚れて新造を買**

省二＝初篇に『青田に成つて乳の見える人』の解釋の時に、麈山翁から青田の御説明があつた。此句もそれだらうか。しかせば「末摘花」中のもの。

東魚＝良くなるが悪るくなるか分らぬ場合を、青田に比する事もあるやうだ。この句大成するかせぬか分らぬ乍ら、清新な處に惚れて、と解せぬ事もないやうに思ふ。

麈山＝年増ならば青田と云へるが、新造に青田は少し判らぬ。されは此句の青田は、新田の意ではない歟。

あらゆる趣味のお稽古場
松坂倶樂部
手はごきから奥義まで氣輕く、樂しく、御上達
會員募集
お稽古目
長常清小鳴
磐唄元津物
尺八琴舞謡能
曲八踊曲鼓小
ピアノ聲書日茶
道樂道書本
華料洋俳川
道理栽句柳
氣棋松坂吹込
學道所レコード
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階
坂松倶樂部へ
話電(代表)三〇〇三戎番
松坂屋
大阪 日本橋

同舟近詠

松山　前田五健

隣組女中全權仕り
愛のない批評學問鼻にかけ
或時は金程弱いものはなし
人の世に數字なぞあり泣笑ひ
老刑事曰く「勘ですよ勘ですよ」
七福の誰れやらに似た影法師（狸の謡聲）

金澤　安川久留美

無庭庵近詠

隣邸の松は枯れても飢は無し
一ッ呑め一千圓の古九谷だ
コスモスの如く總頭のびました
妻老ひて一萬圓の夢見たり
住み馴れし長屋に長き竿の丈

兵庫縣御影町　長崎柳秀

生活の中が見え透く夏の路地
軒借りて親子三人くちすごし
心勞に父の言葉に角が立ち
釣竿のさきに浮世の苦を忘れ
頬骨に意地を通して淋しがり
お言葉は判りましたと脊を向け
喧嘩した仲とは見えず老夫婦
地下鐵で待ちつ待たれつ別に乘り

今治　長野文庫

パーマネントその名で流行り名ですたり
語學校前で排英ワッと云ひ
世界地圖十五年版はや古し
何々夫人衣裳比べも夢となり
日記へも祕密にしとく祕密出來
第三者無闇矢鱈に激勵す
ボロ儲け甲斐性者とは奇怪なり

平穩村の忘園　（邸島中の濃信）　中島榮施・郎島中・二省子姪・子ルテ島中・金澤有井舊郎

小刀鍛冶

蛭子省二

「武玉川」四編研究中

小刀鍛冶のロか利過

に對し、私は『小刀鍛冶のくせに、己の作は三條小鍛冶以上に切れるなどとふく』と、附註した處、コガタナ鍛冶か、セウ刀鍛冶かとの話が出た。

「國民百科辭典」の小刀（コガタナ）の項に、『笄ト共ニ刀ノ鞘ノ脇ニ差スモノ。用途ハ今日ノナイフト同樣、紙ヲ切リ又ハ果物ノ皮ヲムイタリスル。新井白石ノ隨筆ニモ柿ノ市場ニ出ル頃トナレバ、小刀ガ錆ビルト記シテアル。主トシテ刀鍛冶ガ製作スルモ、專門ノ小刀鍛冶ガアッテ勝手ニ名高イ刀工ノ銘ヲ切ッタモノガアル。又、幕末鐵拵ノ刀ガ流行シタ頃ハ、小刀ト小柄共鐵デ作ッタモノガ多イ』と。

筆者は鑑定家にして、多くの著書を世間に送つて居らるゝ川口陟氏である。この説明が其儘「口が利過」の句釋に、參考となるのは嬉れしい。

尚、同氏の『日本刀の外裝—刀劍談の內』に、『圖は小柄笄と併稱するもので、これを二所（フタトコロ）といひます。小柄の方は先に小刀を附し、今日のナイフと同樣に使用され、笄は頭髮を搔き上げたり、かゆい所を搔いたりするためでありますが、後世には一種の裝飾となりました。此作者も名高い人が多く、殊に後藤祐乘を祖とする後藤家の作が多いのです。之に目貫を加へて三所物と稱します。新井白石の隨筆にも、此頃柿が出るやうになつたから、小柄小刀が錆びると書いてあります。天明頃の川柳にも「爪喰ふた所に忘れる柄袋」といふのがあります。武士が旅行の途中小刀で爪の皮をむいて、柄袋を置き忘れた光景であります。芝居や大衆文藝などに、この小柄を手裡劍に使ふ極めて面白い場面がありますが、どうも手裡劍などといふ武藝が果してありましたかどうか、甚だ疑はしいと思ひます』とある。

「八水隨筆」にも『廣澤先生の咄に、脇差の小刀は九月の末十月の初に、よく研がよしといはれければ、其座の人何故に左いはれしやと問ければ、栗柿のなくなる時分なればといはれし』とあり、又、「翁草」には、松平信綱が小刀をよく研いて置かないと、柿の時節に困るといふ話も出て居る。同じ書に『實休は希代の物數寄者にて、天下の珍物をあつめ、所謂正宗の剃刀、貞宗の小刀……その外珍器佳品員を不知となり。』などにより、小刀鍛冶を知る資料とならう。

故に句意は、專門の小刀鍛冶でも亦、凡庸或は未熟な刀鍛冶の場合でも通じはする。講釋師によると、平素向槌やふいごを扱つて居る稽古中の弟子達に、年頭に際し師匠は、一本小刀を打たせて試驗をするといふ事があるさうだ。こんな弟子達も陰に廻つては、口が利過ぎる程講義はするであらう。

「和漢三才圖會」に、『武備志日本考云、有小裁紙設機刀、出長門、號兼常者最嘉』とあり、序にこの兼常に就て知りたく調べたが判らぬ。他地方に兼常はいくらもある。

萍花、乘郎兩學契の多大なる御配慮感謝にたへぬ。（安代溫泉にて）

★

雲中語 (2)

寺井鋭々

乳屋は通り、新聞配達は通り、電車、バスは駛り、工場の機械は運轉し、世間はもう朝の活動を開始してゐる。

進軍ラッパは、高らかに鳴りひゞいてゐる。渤湃たる大濤が、目の前に押し寄せて來てゐ

旅裝解きながら話をかいつまみ
めい〳〵に自惚れのあり書道會
にぎやかに供へ初盆また淋し
海の月野の月家の月で飲み
水遣つた鉢を並べて煙草の輪
章魚の味少々顎がくたぶれる
世帶苦の賣らねばならぬここまで來
放たれる羽ばたきになる退け時刻
軍需工目ざして田畑捨てゝ出る
これが苦の種か百圓札で借る
ハイヒール小石一つに体崩る
退いた社へ生命保險勸めに來
下駄箱の上に朝顏咲きすぼみ
借用證ベタベタベタと判が要り

神戸　潮田明坊

晴耕雨讀にあらず繩をなひ
神經が八分ですとは言ひつれど
第六感なごと後からの話
似て非なるものとは知れど軸をほめ
代筆へ女の氣持ちになつてかしこ

愛媛縣大洲町　今川椋影

野球の父

古川風竹

◇「川柳雜誌」にベースボールはどうかと思ひつゝこれを書く。

◇ホノルルの山手絲濃きヌアヌ岡の墓地に野球の父祖アレキザンダー、カートライト（一八二〇—一八九二）の墳墓がある。小豆色大理石の立派なものである。

◇私は日本やアメリカから野球人が來るといつもこの墓に案内する。この夏私共の日布時事社で慶應野球部を招聘した（ハワイでの戰績十勝二敗。）ある日三田健兒たちを案内しカ翁の墓前で一くさり辯じたのがこれである。

◇紐育から餘り遠くないクーパースタウンといふ田舍町の青年たちが一つの球技を案出した。それが今のベースボールで、時は一八三九年の春

◇その青年群の中で野球史上に名を殘したのは二人きりだ。一人は野球規則を創始したアブナー、ダブデーで、後に陸軍少將となつた。いま一人はダイアモンドを作つた之の物語の主人公カートライト。

◇これは數年前カ翁の曾孫（ホノルルの實業家）から直接聞いたことで、翁生前の直話である

◇野球規則の大體が出來上りさて試合場のデメンションをどうするかとなつた。カートライト青年は一つの基點（ホーム）から三十歩踏んで小石を置き之を一疊とし直角に左折してまた三十歩の點を二疊とし同樣に三十歩して三疊を定めた。

◇こうして無雜作に內野は出來上つた。三十歩を測つてみると丁度九十呎である。九十呎正方形のダイアモンドは爾來野球技の變遷、規則の改變に崇られず百年不動である。いやこれだけは永久に變るまい。

◇疊間の距離が一呎伸びても縮まつても野球技には大異變が起る。カートライトがどうして九十呎ときめたか、それは偶然でなくインスピレーションであつたらふと曾孫はいふ。

◇カートライトは、その後流轉してハワイに來り立身してホノルル消防署長となつた。子孫は榮えてゐる。カ翁の像がクーパースタウンの野球記念館に祀られてゐることはいふまでもない。

◇慶應選手たちはカ翁の墓に花環を捧げ野球の父祖に敬意を表した。（カットは晩年のカ翁）

る。

それに、それに、まだ豚のやうに惰眠を貪つてゐる人間がある。

それに、それに、それに、榮螺のやうに家に閉ぢ籠つてゐる人間がある。

それに、それに、波に逆つてヘナ〳〵とした手足で、泳ぎ越そうとしてゐる。

之が舊體制の夢を見てゐる輩である。

★

歷史的大轉換、それは我國にも、全世界にも、太陽の運行の如く些かの停まりもなく、少しの緩みもなく、巨大な步調を以て、それが開始されてゐる。

大事件だが、極めて自然である。

自然には、小さい人間の到底抗し得べくもないことは、明か過ぎるほど明かだ。

★

靜觀がよい時もある。諦觀を必要とする時もある。しかし達觀は、いつの場合に於ても、最要のものである。

★

迷ふたり疑ふたりする時、强大なる指導者に從ふのが、最良の道である。

★

本當の信賴は、自分自身が自分に判つてから、他人の長所を認めた時に起る。

★

春の次に夏が來る事は、誰一人疑はない。

明日の日に何が來るかは、誰一人判らない。

★

衆智は、如何に論議が分れてゐても、結局は纏まつて、正軌道に乘る。

衆愚は、論議をすれば論議をするほど、離れて行つて、遂には脫線して了ふ。

★

小言は、泥の中でうごめく田螺の聲に等しい。

理屈のたゝぬ不平は、小犬の遠吠にも及ばない。

漫然たる非謗は、秋の蚊の鳴聲ほどにも、感じられない。

警告は、さつきの空をついざいて飛ぶ時鳥の裂聲である。

鶴の一聲は、至上命令である

★

小さい花でも萩の花は、誰でも知つてゐるが、芙蓉のやうな大きい花でも、之は何の花ですかと尋ねる人が、かなり多い。

「芙蓉峰」とか「楚々たること芙蓉の如く」などゝ、形容詞の芙蓉は知つてゐても、實物の芙蓉を、案外知つて居らぬ。

すべての事に、人間は此の程度でも、生きて行くには事缺かぬが、それでは充實した生活とは云へぬ。

觀察と認識と省慮、それが人間生活を向上せしめる原動力である。

★

前にナチス黨大會で、時計爆彈を仕掛けたのは、イギリスのスパイだとの事だが、今度ドイツは、バッキングガム宮殿や、セントポール寺院へ、空から時計爆彈の御見舞をやつた。天から落ちる爆彈には、警衛者が居つても、防止の方法がない。

創作も原稿もすべて國策に副ひ、健全な思想、明朗な趣味に生きるやう、お互ひに留意しませう。

編輯局

耳の化膿症に
適應症の一部
扁桃腺炎
中耳炎
齒槽膿漏
蓄膿症
丹毒・癤
麥粒種
乳腺炎
錠アルバジル
アルバジルの特長は、從來の對症藥の如く病原を衝かずして表面的症狀のみを輕快せしめるのとは全然趣を異にし、內服に依り腸より吸收せられ淋巴液に依つて全組織に滲透し諸化膿性疾患の病原菌を直接衝いて之を撃滅せしめる所謂化學療法劑としての使命を完璧に發揮する點にある。
內服・短期・奏効
20錠 4円
100錠 17円

三十石そのほか

前號「省二氏に聽く」の稿中、談淀川舟行に及んだので本稿を孤篷氏に請ひ參考の資とした（編輯局）

戸田孤篷

（一）淀の川瀬

日本書記神武天皇御東征の條にみえる盾津は今の牧方あたりだと云ふ。まだ河口の濕地であつた事は云ふ迄もない。皇居が大和から山城へうつると都と海をつなぐ此水路は再び史上に浮び出てくる。紀貫之が任地土佐から京都へかへるさの紀行文土佐日記の後半に淀川を上るくだりがある。川口から溯航するに正味四日かゝつてゐる。

淀二十石由緒書の中に見える次の記事が川船の濫觴を物語る。

「淀廿石船ハ往古ゟ有之、其初相知不申候先祖ゟ申傳候ハ神功皇后異國御退治之時之御舟子之子孫にして八幡宮ニ附從候舟ニ而、元ハ八はた社務之支配に候と申傳、御神役只今に至り勤來候、又右八幡宮之行幸御幸之毎度、御乘船、御渡舟又ハ組舟浮橋等之事舊記ニ御座候云々」

此川筋を華々しく利用する樣になつたのは豊公伏見築城以後の事で、その前後に於ける流水の具合はくだ〳〵しい説明を省いて挿圖を見ていたゞく事にする。

尚別圖にある淀城の北を流れる水道には有名な淀の川瀬の水車がかゝり、歌に繪に豊富な題材を提供した。

（二）淀の川船

淀川を往來した船は前にふれた八幡宮にゆかりの淀二十石船の他に過書船と伏見船が主なるものである。

過書船の過書と云ふのは關所通過の手形の意味で、免許狀を貰つてゐる船で二十石から二百五十石或ひは三百石の大さで天正年中がその起源とみられ、慶長八年に家康から朱印が與へられてゐる。番所は伏見納所村にあつた。

淀二十石船は元々過書座の中に含まれてゐたが享保九年以後法制的に復活されるまで過書から仲間はずれにされてゐた。と云ふ釋は先の由緒書にもあつた樣八幡宮の關係から何から笠に着て威張るのと、も一つは大阪陣の時に德川幕府に對する忠勤であつた。大阪傳法尼ヶ崎に住んでゐる三十石以上の舟子達は好むと好まざるとにかゝはらず東軍の命令に應じられなかつた。只淀二十石方のみが渡舟に運搬に活躍戰功によつて種々の特權が與へられた。それが過書仲間の反感を買ひ、淀船は十八石なりと主張して繼子扱ひをはじめた。あわて出した淀方衆は陳情に嘆願に苦心を重ねた末、將軍吉宗享保の治に巡り合つて訴願の趣は取り上げられ正式に過書仲間へ加へられる事になつた。

も一つの伏見船と云ふのは川筋交通發達により發生した全くの新船伏見十五石船と云ふもので、之と過書との間にも摩擦があつた。が統制主義の封建の槌は新しく出た杭とともに古き杭も適當に打たれて過書座と圓滿に幕末まで兩立して行つた。

（三）三十石船

此河上の往來で乘客を主としたのが三十石船である。先づ船の數の問題であるが三十石船だけ獨立して見るのは困難なので過書座全体として享保寛保頃は

過書船　六七一艘
二十石　五〇七艘
寶暦十二年には
過書船　七四〇艘
二十石　五〇七艘
伏見船　二〇〇艘
天明七年には
過書船　七四〇艘
二十石　五〇七艘
伏見船　二〇〇艘
嘉永五年には
過書船　八七七艘
伏見船　二〇〇艘

運行數に關しては享保の記錄に

一ヶ年
上船　三六〇〇艘
一五〇〇艘　淀へ
一五〇〇艘　伏見へ
五〇〇艘　鳥羽へ
一〇〇艘　牧方へ
下船　二五〇〇艘
九〇〇艘　淀より
一三〇〇艘　伏見より
二〇〇艘　鳥羽より
一〇〇艘　牧方より

次に三十石船の大きさは五尺一間で長さ七間一尺六寸巾一間二尺寸と云ふ。

定期一日に一回以上伏見大阪間を上下し所要時間は

上船　一日又は一晩
下船　半日又は半夜

早登三十石と云ふのがあつたがその所要時間は不明。普通は一般乘合廿八人と水主四人であるがこの水主でも增して速力を早めたのであらう。一說には乘員總計三十一人とも云はれてゐる。

寄港地は運賃制札によつて判斷するのが妥當と考へる。それによると上船は牧方、淀、鳥羽伏見、下船は牧方、大阪となつてゐる。尚攝州傳法尼ヶ崎が寄港地になつてゐた事が記錄に見える。

船宿は大阪八軒屋と伏見中書島に各二十五軒づゝあつて、各指定の相手方の宿宛に船を仕立てる。一軒毎に一日一艘づゝ出るとして少くとも五十艘、三十人づゝ乘つてゐたとしても上下で千五百人が移動した。

運賃は時代により差異あり、前記各寄港地宛に定められてゐる。

寛永三年には上船　淀　牧方
三十石借切　伏見
一三匁　一一匁七　七匁八
乘合一人　一七文　一五文
一駄荷物　三五文　二〇文
同じく下船　大阪　牧方
三十石借切　四匁四　一匁七
乘合一人　一〇文　四文
一駄荷物　二〇文　八文

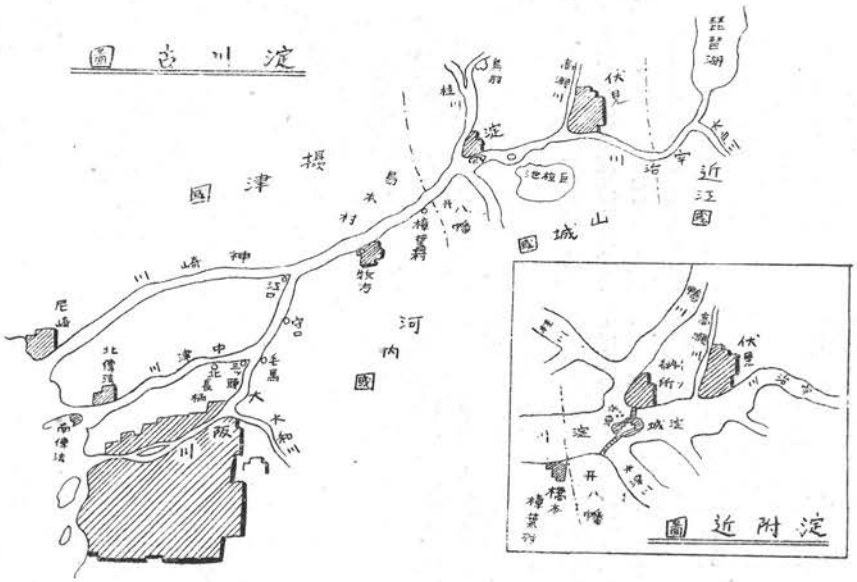
上りに比し著るしく安いのは三十石の舟子達には歸り船になるからである。

（參考）寛永年間米一石慶長銀二十匁——二十三匁六
享保九年には上船　伏見　淀　牧方
三十石借切　一九匁五　一七匁五　一一匁七
同早登　二五匁　二二匁五　一五匁
一駄荷物　一一八文　一〇二文　六五文
乘掛下荷　七六文　六五文　四三文
乘合一人　五二文　四六文
同早登　八三文　七三文
（參考）享保年間米一石四十三匁——五十匁
幕末は
乘合一人　上り　一四〇文　下り　七二文
（參考）米一升一七〇文

尚蒲團賃や火鉢茶碗の借賃飲食の定めもあり、仕切と稱して何人分かの運賃を拂つて廣い坐席を占める事が出來た。

川筋航行と云ひ條入津料にあたる石錢や米拂でする浚渫料も規定されてゐる。

取締は一般警察事務の他に危



募集句

一路集

家庭　鮎美選

お二階を借すことにした新家庭　風來子
家庭向きコースあんまりつまらなし　琴聲
歸還して家庭の無駄が目にうつり　一龜
征く父へ強き家庭の老母の幸　紫風
一日を終へて家庭の氣にひたり　翠葉
家庭メモ切りつめながら貯金書く　勘平
家庭でも氣をつけますと母の汗　若榮
鼠はや家庭の空氣知つた音　曉明
家庭を出ればペコペコ平社員　ユリエ

佳作

ヅタ〳〵の家庭女給さん草臥れた　白鷗
日の丸を揭げ家庭は平和です　賢次
孝行の家庭を訪へば父が病み　久人
家庭から南支の月を眺めてる　角堂
御家庭にゐませば唯のおぢいさま　若榮
(人)幸福は家庭にあつたと友の文　美奈子
うれしき懐郷があり愚ろかなる自己のいつ
さいを捨てゝ悟道の生活に生きてゐる現在
の歩一歩にしみ〴〵と過去の家庭をなつか
しむまどころのにじみ出てゐるとの手紙を
讀む又は相槍の情を惜しまぬでせう。家庭
愛にめざめた哀詩とも謂ふ。
(地)健やかな祖母ゐて家庭ゆたかさ　葉光
添ふて十年の家庭そこに祖母あり、うるさ
きほど來て何呉れとの世話、薪まで割つて
歸るそれなればいつそ寢泊りして家庭に加
つてくれゝば好いのにと言へど左樣はせず
いろはかるたの水に舟式の祖母さんであり
痩せてゐられるのが氣の毒です。
枯淡な作風を採る。
(天)モンペ裁つ家庭へ秋の陽ぞしする　半絃
紀元二千六百年のよい詩です。求むる光は
やがて銃後の熱誠となる。良妻賢母の尊く
生々としてゐる國民服が出來た以上モンペ
も新體制に出でゝより大きい使命を持つも
のです。よく詠へてゐて編中の白眉です
(軸)一粒の麥の話は家庭の灯　鮎美

ポスター　民郎選

ポスターの期間が過ぎたまゝに秋　葉光
ポスターの顔が政見聞いてくれ　神樂
引きつける登山ポスター雨になり　勘平
締切のすんだポスター風に鳴り　曉明
くらがりで讀めたポスター貯蓄の字　ユリエ
ポスターへ日の丸一ッ奉公日　靜子
ポスターを張つて町會役員か　半絃
ポスターを子供拾つて歩いてる　翠芳
ポスターはみな緊張をせよと言ふ　琴聲
醉うてゐる眼へポスターはは　同
ポスターの紙一枚の美しさ　香林坊
ポスターを見るでもなしの待呆け　波夢造
ポスターのビールの泡を見て來た　洋
ポスター貼るこゝら邊りに酒屋あり　白鷗
ハイキング古いポスター見て通り　美奈子
夕立へポスター涼しくぬれてゐる　同
犧牲者の上にポスター凛と立ち　弘樓
ポスターを見てゐる人の足をふみ　彌生
國債を持つ手へポスター笑ひかけ　賢水
ポスターの中の運動會も濡れ　同
ポスターの蔭で事務員笑つてる　若葉
ポスターへ防諜の話妻がする　青風
會場へ來てからポスター見直され　一龜
ポスターで知つてハイクの道變へ　抱一
ルンペンの一夜へポスター搖れかゝり　風來子
ポスターのどれも皆んなに讀んでほし　みづほ
ポスターへ世相彩る新文化　照波

佳作

ポスターと風鈴の音駐在所　紫風
ポスターへトンボがとまりかねてゐる　賢水
顔剃の向く方角に見るポスター　風來子

「一路集」の句稿で締切後着のものは選者に廻着いたしませぬから、特に御注意願ひます(編輯局)

山川と一戰

切手蒐集の事ども

古川魔花麗

險防止のために夜間の乘降を嚴禁した。

最後に「くらわんか」船に一言ふれる。くらわんか船と云ふのは大阪陣の時秀忠の危急を救つた牧方在の舟方が、後恩賞の沙汰に際し人をぼろくそに云へる商賣が出來る樣願ひ出た。その結果河中に於て三十石船客へ飲食をひさぐに「餅くらわんか」「酒くらわんか」と云ふ風に呼ひふりして御かまひなしと云ふ特權をあたへられた。

(四)かきおとし

川の交通は人も主なる仕事の一つであらうが貨物を運ぶ事は更に興味がある。馬關を廻つて北國船が大阪へ入る樣になるまで全ての北の貨物は若狹まで來て、そこから琵琶湖岸に運ばれ更に船便によつて湖を縱斷瀨田川、宇治川を經て淀川に入つてゐつた。このルートは陸上交通の困難なる時代によく使命を全ふし明治時代に於ける日本橫斷運河論を暗示した。この案は工事の難易によるか經費の點か未だ實現してゐないが國防上經濟上別して日滿支ブロック完成の今日も少し取上げられていゝのでないかと思はれる。淀川の水運と琵琶湖の水域と江若の山嶺を突破して若狹灣に出ようと云ふのである。近代科學により適當の水深を與へられた水路は太平洋と日本海の水を一つにして時には三萬噸の巨艦が、又ある時は船腹を日滿の物資でふくませた日の丸船隊が淀川堤に昔ながらの花紅葉を賞しつゝ國策第一線につく日が來ないとは斷言出來ない。

私たち切手蒐集に趣味を持つてゐる者六七人で、アロハ・スタンプクラブと云ふ會を組織した。この記事が東京で發行される「切手趣味」紙上に發表されたので、日本の蒐集家から祝詞や、色々な問合せなどが毎便どつさり入つて來る。趣味に生きる人間の世界は廣い樣で案外狹いものだとつく〴〵感心した。全然見ず知らずの人から新しい切手を贈られたり、風景特印を贈られたりして、こんなにして貰つてもいゝのだらうかと思ふ事が度々ある。

見ず知らずの人と言へば私は今まで米國切手を專門に集めてゐたが、日本や滿洲も集め度いと思つて、京都の荒木とみ子氏の名を蒐集家名簿で見て、日本滿洲等のカバーの取次ぎを依頼した處、心よく引受けて呉れた。その後毎便初日風景特印、初日カバー等を送つて貰つてゐるが、實に頭のシャープな婦人であるらしく、一つの特印を取るにも風景印と切手の撰定に相當頭を使つてゐる跡がはつきり分る。そして彼の女の手紙と對照して見て、日本の近代女性が明朗に、すく〳〵と伸びてこうした趣味の世界にぐん〳〵と喰込んで行く樣を想像して蒐集家にのみ許された滿足感に浸つてゐる。頭の働きの序に面白い話がある。ある友人が「日本の役人さんは、大部分がハードヘッドの見本の如きものだが遞信省には仲々面白い人がゐるらしい」「どうして君にそれが」と問ひ返したら次の樣な話をして呉れた。日本の切手で乃木將軍の肖像がある切手は二錢で、東郷元帥の肖像があるのは四錢となつておる。どちらも國家に對する動功は同じだのに片方は二錢、片方を四錢にするとはけしからんと談じ込んだものだ、そうしたらお役人さんは遞信省ではどちらも公平に扱つてゐますと言ふ、然し二錢と四錢は同等ではないが、と言へば、役人さんは左の通り言つて聞かせた。即ち乃木將軍は山川草木轉荒涼で東郷元帥は皇國の興廢此の一戰にありで共に有名である。乃木さんの切手は二錢だが山川(三錢)と云つたから二錢と三錢で五錢になり、東郷さんの切手は四錢でも一戰(一錢)にありと云つたので四錢と一錢で之れも五錢で兩方共上下はありませんとは一寸面白いではないか、これなんか我々の若い時代に流行した福引の「武士に向つて無禮であらう」「切つて仕舞へ」(切手四枚)より頭を使つてゐるだらうと友人は付け足した。

非特異性全免疫元
オムニトッメコ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
(適應症抜粋)
流感、各種肺炎、肋(膜)膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓋膿發、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
(特長)
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
(包裝)
三cc 二〇錢入
三cc 五〇錢入
一cc 一〇〇錢入
一cc 二〇〇錢入
發賣元 株式會社黒田藥品商會
大阪・東京
—文獻進呈—

近作柳樽

麻生路郎選

八月二十二日不朽洞に路郎師を訪る（二句）

象牙の塔とわに生きなむ心かも　松江　勝谷山川兒　同

さるにても書籍の中のきりぎりす　同

女すぐ酒を換算せむとする　同

女中さん財布の中を見せ合ひぬ　同

クロールのうまさ褌一つなり　同

一列に車を送り呑み直し　同

さればとて職工さんに嫁く氣なく　同

親しき友應召

召集の先を越されて笑ひ合ひ　同

君と僕はだかのまゝで西瓜切る　大阪　富岡巨人

嫁さんを貰つてやれば寄りつかず　同

全卷の終りに國債買ひませう　同

髭の方は課長ないのは社長さん　同

尼さんの眼に產めよ殖やせよ　同

賞罰のない履歴書に蚊がとまり　同

雨だれの波紋は意外に大きいぞ　同

轉業の人に儲けを聞かされる　同

善後策一人はすつと窓へ立ち　東京　田中青風

琴爪へ指柔かく娘は內氣　同

繕つて見合の膳は趣味の事　同

石の門ピアノ敎師とお孃さん　同

嫁き遲れ詩が好きこいひある雅號　同

雲一つ一つ初秋を知る日なり　同

看護婦は留守偷み讀むものがあり　同

病苦あり閑居不善を救はれる　大阪府高石町　米本貴志子

だん〳〵に開く二線に夫婦住み　同

キヤンプ氏へ演藝放送向けてやり　同

排英熱がカルテの様に上下して　同

長男徵兵合格

大君の盾となる子を見直しぬ　同

千金の雨にスフの兒ぬれて來る　同

小使があつさり詰めた詰將棋　大阪　津路紅多呂

平面圖此處が風呂場になるとこか　同

墓參り井戸の深さも久し振り　同

惡童の頃を体操へフト想ひ　同

嘘つけず誠云はれず酒を飲み　同

マッチする男の指が細そすぎる　同

鷄骨一羽分五錢也

統制はかしわの骨にまで及び　和歌山　秋月宏方

蚊柱は蚊が空襲をしてる樣　同

落ちぶれて床の間もなき家に住み　同

幾何三角解くに母親にはあまえ　同

溺死者の飲む水もあり海の水　同

犬死にさゝぬと同志等は怒り　同

醫者呼んで枕元なご片づける　愛媛縣大洲町　米澤曉明

見合の娘實戰談も聞いて來る　同

窓外の眺めも徐行する峠　同

小說の瞳はなさずトンネルへ　同

銀翼で僕も忠義が盡くしたい　同

吉報は走書でも脫字でも　同

子守唄別に習ふたわけでなし　兵庫縣　酒井美知夫

自轉車の辨當の嵩も土工さん　同

ノーハット大きな頭してるなり　同

戰況のニュースへ濟まぬ蚊帳を吊り　同

いきなりの生年月日行つまり　同

看板の薄利多賣も過去のもの　同

貝釦

★岡田某人

陽氣な墓場。陽が一ぱいで、見下ろす街が霞んでゐて、海が見える。黃色く乾いた土。こゝには死の觀念はない。殖民地といふ感じだ。

※

後悔してゐることが自慢になるなんて、おかしな話だが、事實は尠くとも通用する。

※

季節の入れ替り時の、あの身ぶるひを感じるやうなメタフィジックな昂奮は一體何から來るのであらうか。溫度か、空氣か、風景か。僕はこの原因を多分メンタルなものだと見當付けるのだがどうであらうか。

※

博覽會建築。遠見は光彩陸離としてゐるが、近づいてみると、粗塗りで隙間だらけ。內へ入つてみると……がらんどうだ。雨でも降つてごろうじませ。

※

インチキだとすぐ判つてしまふインチキ。これはむしろお人よしなんだ。

※

神聖な村。——今はもう代が變つてしまつた。——神聖なものは滅びるのがさだめでごわす。——が、それに取つて代つた神聖ならざるものも、時が經つにつれて次第に神聖化（樣式化、精神化されて、そして滅びるのである。

※

素朴な精神が考へ出した神話、怪異、妖精譚などが人の心を打つのは、それらの人にとつてはそれがまぎれもない現實であつて、彼等はそれを、衣食住と同樣に生活してゐるからである。そんなにして把握され確認された架空といふものは、すでに架空ではなくして一つの事實なのだ。しかも彼等は、それを現實とみなすが故に何等の誇張も扮飾もしない。それが、より以上に人の心を打つのである。

※

あちらの高原で一年。こちらの村落で一年。都會で又一年。鑛山で一年。海村で一年。斯うしてその土地土地の物語を書いて行けたらどんなにいゝだらう。

※

マンネリズムに陷らない藝術家なんて本當の藝術家ではない。藝術とは一つのマンネリズムぢやないか。斷つておくが、こゝでいふマンネリズムとは、所謂イージーゴーイングなそれではなくして、一切の運動——作者の——の重心、または支點のことを云ふのだ。通俗作家とはそのポイントがなくつて轉りまはる不見轉のことだ。

※

牛の如く、馬の如く。

お食事とお茶の店 湖月 法善寺境內

子を死なしたらちねの母乳しぼる　大阪　公木示右
寂しければ凧揚の子の凧借りぬ　同
マッチ借るときだけ課長席を立ち　同
曼珠沙華物に憑かれたやうに咲き　同
ひたぶるに咲き曼珠沙華は強い花　同
曼珠沙華篤二郎の歌利玄の歌　同
夏服を仕舞へば虫のこえとなり　大阪　平川久枝
をみなへし浴衣の袖に少こしゆれ　同
洋裝でくればくだけた話され　同
視線またうまくそらした絹團扇　同
即答は双のゑくぼでごまかされ　同
萩亂れ咲けり狂女の髪に似て　愛媛縣大洲町　上甲可洲
金言に似た事を言ふ禁治産　同
ポケットが砂糖半斤程ふくれ　同
我が姿働蜂に似て淋し　同
釣れるかと宿の浴衣で寄つてくる　同

妻の里

大阪の話みんなに圍まれる　大阪　夷一笑
今朝ひいた畠のもので晝の膳　同
牛小屋の隣りが暗き風呂場にて　同
手のとゞくところはいちゞくみな青し　同
ほん踊瓜やなすびの二番なり　同
藥瓶コトンと秋の音をたて　山口縣　三原狂路
灯を下げて妻冬のもの縫ひ急ぐ　同
見えすいた嘘に相槌させられる　同
パーマネント今夜は和服召し給ひ　同
産卵を強ひるに無理な餌を與へ　同

戰友の墓に詣でて

空蒼し君よ武勳を語れかし　福岡縣甘木町　大西洋

友人T歸還

多々的食べるよとその逞しさ　同
新世帶まあ敬遠をしておこう　同

兵營の窓から

それからねそれからねえと子の話　同
兵營の話親父も負けて居ず　同
胸に波うち息ひく患者から除ける鉢植　海拉爾　小川靜觀堂
我名呼むで兵逝けり隣るベットにも兵あり　同
手に入れたチーズが呼んだビールなり　同
王冠を苟もせずビールのむ　同
さる所でよばれだ飯の白かりし　同
まじなひで癒る病はしれたもの　大阪　山本葉岩
雨やごりせずに兵隊濡れてゆく　同
割箸へ母も混じつて嬉しい日　同
金魚ふと欠伸を捨てに浮き上り　同
老夫婦喜劇のやうに仲がよし　同
嫁がない覺悟へ母も淋みしみぬ　兵庫縣寶塚　森本秋子
多忙とは思ひ切れとのことかしら　同
吾が胸に君し住まねば嘆けかむを　同
令嬢の惱みは酒場にも住めず　同
せゝらぎがそつと私を呼ぶような　同
蛙遊べて圓葉尖り葉三角葉　松山　山本耕一路
孔雀伏すやうにコスモス倒れてゐ　同
一塊の雲嚙みついてゐる冬木　同
高層都市人が日向の底にゐる　同
カルメンじむ蔦多きバルコニの娘の　同
幸福の定義へメスも入れて見る　岡山　静江改め本田ユリエ
虚榮心兎に角買つて行きませう　同
終止符へ未練の殘る女なり　同
待つてゐる顔へ千人針が來る　同
服屋のサイズへ上役無抵抗　同
日曜も勤めてしかも五勺減し　松江　田中都之介
劫爭ひ煙管しきりにつまるなり　同
從軍僧以下足音もなかりけり　同
棚經に來て防喋を一とくさり　同
蘭印へ行く大臣が父の年　同
横からも寫されてゐた優勝校　松江　寵光寺　豹
日向まで看護婦さんは足になり　同
子が出來て煙草の格を一つ下げ　同
海南島地圖の色さへ暑そうな　同
二百十日祖母もラヂオも無事と云ふ　名古屋　鈴木可香
良寛の心に觸れし秋の雲　同
姑娘に鄉愁があり月を見る　同
鐘の音は濃尾平野に尾を曳いて　同
副業に筆生もした近視眼　同
固いものピアノを叩くだけの指　同
士用干内氣な亡姉の柄に泣き　大阪　橋本美奈子
召されたを云はず丸刈つきつける　同
念入りに掃除はしたが誰も來ず　同
未亡人となつて恩師を訪ねて見　同
赤蜻蛉火の砲身をよぎりたり　北支　月原宥明
裝甲車ひるにはこんな世帶あり　同
裝甲車覗けば胡瓜刻んでゐ　同
惡疫へ西瓜の出來を賞めるだけ　同
節約に非ずお錢がないのです　神戸　卑上一翁
勇退と云ふ事にして追ひ出され　同
雨だけが頼み約束して終ひ　同
美貌をば寫眞屋の腕にして終ひ　同

〝くのちみ〟

二百四十六號を讀む

私が本誌八月號に「川柳人と時局」と題して、一川柳人の時局を認識しない無軌道ぶりを例に擧げて、川柳界への警鐘を亂打したところが、自己を彈劾したものと早合點して、「みちのく」二百四十六號に「馬鹿らしき回答」を書き、――麻生路郎のアタマを疑ふ――と傍見出しまでつけて毒づいてゐる。顧みて他を云はねばならぬことは、如何にも「馬鹿らしき回答」に違ひあるまい。私のアタマを疑ふ、そのアタマを燒き直す方が早くはないかネ。

「時局を辨へず徒らに酒を飲むことの惡いことは敢えて麻生路郎の言を俟つまでもない。然し、飲むと云つても程度問題も考慮に入れてよいと僕は思ふ。」と書くやうでは僕のアタマを疑はれても仕方がない。肝膽相照らしたと云ふ昔の不浪人氏は俺が惡かつた今後は大いに改めやう位なことは云へた人間だつたと思ふが如何。君の主宰する雜誌へ、杉山曉昭氏は

「非常時局でなくとも川柳雜誌の紀行文にはなるべく、飯を何處で喰べた、酒を何處で呑んだ、何處のカフェー何處の料理屋で遊んだなンてことは川柳家を誤解される虞があるから掲載を遠慮しなければならぬ。不浪人氏の〃關西印象記〃にしても我々川柳家は單なる紀行文でなしにその地方の句の傾向、句會の模樣、雜誌の經營振り、川柳家の印象、川柳に現れて居る土地、人情、風俗及川柳家の古事記等を見聞して雜誌に載せて戴きたいものと思ふ。」

と大いに解つたことを書いてゐる。頭でも冷やして、ユックリ讀んで見給へ。君が一本宛飲んで廻つたか、三本宛飲んで廻つたかそんなことを僕は、とがめだてしてゐるのではない。轉載されて困まるやうなことを麗々しく天下に公表するなと云うのだ。君の雜誌は眞逆秘密出版ではあるまい。

君が何處までも程度問題を云々するなら、私が引用した次號に、書いてゐる「上京の收獲」の一節を更に引用しやう。

「懇親宴が終つてから在京の△△△△君（黑石出身）と×××××君（青森出身）と僕の三人は新橋烏森の古今亭で制限時間の十一時頃まで飲んだのである。而も烏森藝妓にサノサ節を教授していゝ氣になる程度に醉拂つたのである。その晩△△君は葛飾に歸る電車をなくなして本鄉湯島に僕と二人で寢たのである。」

と。君の程度問題といふのは藝妓にサノサ節を教授していゝ氣になる程度に醉ッ拂ふ程度なの

品目
純國產GTC潤滑油及グリース
國產GTCオイルダッグ・グレダッグ
GTC遠心式油清淨機
GTCピストンリング

株式會社 田中源太郎商店

大阪市北區樋上町
電話北(36)二五六六
營業所 大阪・東京・札幌・小倉・神戸・天津・北京・上海・奉天

言ひ譯がだん〳〵不利な袂糞　長野縣須坂町　高峰柳兒
熱帶魚にマダムあつさり飽きて居る　同
降り模樣商店法も待たず閉め　同
ひげが氣になる病人のいゝ氣嫌　同　岡山　生子敏子
愛情のこゞかぬ果に君居ます　同
同い年女中が選つて呉れた柄　同
君の筆ぐせまねて居るのに氣がつかぬ　同
未練なく電話も先に切りました　同

○血記

出たい丈出よ喀血位に死なぬ俺　廣島縣竹原町　西野みづほ
血の泡へ生の執着捨て難し　同
闘病七年得たは醫藥の無力だけ　同
大自然に生きん體溫計を割り　同
人前の合掌心からでない　ハワイ　長谷川猿吉
國籍を離脱矢張り日一弗　同
恥を氣にするから何時も人後なり　同
失敬な言ふ時日本語が混り　同
大平洋祖國の船と認めたり　大阪　吉川琴聲
佛像を一人でかつぐ舞台裏　同
盛り場をしづかに拔けた歸還兵　同
擴聲機なんだ迷子を言ふてゐる　同
制服の自分を小さく乘つてゐる　廣島　中西心太樓
犬飼ふて一ぜん足りぬ飯でありキャンデーは休みうごんはまだやらぬ　同
時代の勢ツてはこ子に聞かれ　同

休暇

休暇こゐる水兵土產に手が足らず　大分縣佐伯町　坂本遠見路
流れ來る如く大阪近づきぬ　同
並ばなきや賣りませんよと云はれて居　同

從兄の死

薄命の君にリボンの巾廣し　同
送り人もなき靈柩車秋の野を　堺　居谷一柳
なんこでも言へ空想で生きてゐる　同
モンペイの姿却つてお氣に召し　同

伴隆信の入隊を送る

星一つ光る姿の雄々しさよ　同
月見草男の愚痴にゆれてゐる　兵庫縣加古川町　水田光哉
禮云うてお愛想いうて買うて來る　同
節米に夜の活字のかすめごも　同
本伏せて留守居時計のねぢをまき　同
新聞屋今朝は乳屋こ一緒に來　名古屋　八幡勿來
吊革を掴めば前の人の汗　同
ポスターの裏で急告はり出され　同
折箱を捨てるに子供高く投げ　同

オリンピックお流れ

五輪旗も眞劍勝負へ近寄れず　大阪　有馬千斗

映畫「民族の祭典」來る

勝つた泪泪へひろがる日章旗　同

某基地は何處であらうが勝ち戰　同
國防機一人で献じいゝ氣前　同
要領で渡る人生ありはあり　廣島　石原伯峯
まつ虫すゞ虫ほくに讀書をしろこ言ふ　同

或る女へ

嫁くこても夢多き日を忘れまい　同
アルコールよ弱いこゝをろ嗤へかし　同
自由主義經濟の夢に置き去られ　大阪府　朝田新水
まだ借が返しきれない四十前　同
新秩序時局のわかる顏でゐる　同
折釘も捨てずに國の强さ知る　同
プリンスこ云はれ冷いプロフィル　廣島　清田田鶴子
スランプこ云ふはさみしい云ひのがれ　同
病上り洋書の裏うちなぎをして　同
女事務暇あり123を書く　同
配給で酒屋近頃强くなり　和歌山　保井ポン〳〵堂
女學生おここの昆虫持つて行き　同
佛印をなぜこらぬかこ散髮屋　同
おかへりッこ裸大小こんで來る　同
時々は雲の上にも來て見たし　同
無禮講もう重役はそこに居ず　愛媛縣　武田京司
質屋今日寺總代の顏で居る　同
腹卷の金に手づかず旅がすみ　同
源五郎鮒の話へ汽笛鳴る　大阪　武部香林坊
棚の埃出してレコード見つからず　同
染めてゐる爪を嬲つて暇なここ　同
蛙の子は蛙だなごゝ豚兒云ふ　松江　馬田實
親父にも若き日のあり寫眞帳　同
親は折れ釘子はABC　同
からかへば女工なかなか負けてゐず　大阪　朝野久人
豆戰士はなれて見れば母が無し　同
午前二時蟲の世界へ來た心地　同
統制は妻の要求あり過ぎる　堺　村上角堂
一言を十言で返す妻も老ひ　同
應援もゲームセットに騷がれず　同　丸島利生
我に似て後へは引かぬ香車なり　大阪
大手前親が入つたやうに云ひ　同
追ふならばわれ走らんこ駝鳥ゐる　同
官服の君も借金だらけなり　西宮　飯尾寄與史
休閑地蛇よおまへはごこへ行く　同
胡瓜こつ〳〵赤ン坊は泣き止まず　同
何處でごう遊んで來たか男の子　大阪　西田白雨
蠅取紙此處にも英語書いてある　同
極樂はあの世にあらず裸でる　同
不幸中の幸こ云ふので醫者通ひ　大阪　山川富士
こんぼ取る姿のままで行方不明　同
蔭膳へ西瓜一つが塲を取りぬ　同
妹を貰つてくれる友が征く　大阪　戸奈已之助

かネ。程度問題が聞いて呆れるではないか。そんな金があるなら献金でも仕給へ。

序だ。もう一節引用して見やう。

「そこから深川八幡前の「伊勢平」へ乘込んだのは札幌の○○○○○、函館の▼▼▼▼、それに僕と靜岡の□□□□の四名に、東京の◎◎◎◎◎、△△△△、＋＋＋☆☆☆☆☆、★★★★★、△△△△△、と云ふ顏觸れだつた。深川藝妓を顏負けさせてしまふ程騷いだこと勿論である。而も雨はいよ〳〵本降りである。僕の句「およそなき機嫌となつて雨をほめ」にいともふさはしき情景だつたのである。」

と。こんな思想と、こんな行動が今時、日本で許されると思つてゐるのか。同人の杉山曉昭氏か後藤蝶五郎氏を訪ねて教へを乞ひたまへ。廻り舞台に取り殘されてゐる君自身を發見するだらう。今年は二千六百年だぜ。

（君が麗々しく發表してゐる人々の名を全部伏せ字にしておく）

「千草も」の句に就て

柴谷宰二郎

武玉川四編研究（十）の（236）**千草も少殘る袖下**

大家達の御說ではあるが、何んだかびつたり來ないやうな氣がする。素人の考へではあるが着物の事では無いかと思ふ。千草は寡地につかふ藍色の濃い千草木綿の意ではないかと思ひます。庭の千草と云ふ歌はあるが、かりにも垣の袖下と云へばあまり厦くもない場所に殘る千草等と一寸をかしいと愚考しますが如何でせう。

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（係）

催

▼川柳雜誌社川柳忌は九月七日午後六時半御津八幡宮に於て開催▼九月一日、廿九日午後一時松坂倶樂部麻生路郎川柳講座▼九月十二日、廿六日の夜、有恒倶樂部有恒川柳會▼九月十五日午後一時、川柳雜誌社主催川柳とは？の會を三越八階ホールに於て開催▼九月六日夜、住友親友會尼崎句會（以上何れも路郎主幹出席。）

消息

▼蛭子省二氏（朝鮮）は八月十六日、離阪、信州へ向ひ、平穩村の我忘園（中島紫痴郎氏邸）に滯在、靜養と研究に沒頭されてゐたが、九月十一日上京、梅本塵山翁、坂井久良伎其他の川柳人を訪問歡談、きやり社主催の世紀の展覽會でも多くの柳人に會ひ、全く健康人でも一寸出來難いほどの旅行をさしたる支障もなく果たされ、十八日京都へ廿四日の夜の特急で西下、歸鮮されるとのこと。

▼川柳雜誌社松江支部（松江）では松江番傘川柳會、遞友ぎんりん會と共同主催で九月廿三日夜、川柳忌句會を開催。

▼川雜岡山支部の鈴木九坡幹事は九月廿一日夜、廣島の久米雄、風來子兩氏の來援によつて明治製菓階上に支部創立句會を開催した。會するもの、九坡、久米雄、風來子、素木、敏子、ユリヱ、眞佐枝、一二三、魔天樓、四三坊、千苦樂、玄々洞の諸氏。

なんぼでも儲けて居つてよう肥えず　同
元ダンサーいと華かに米をとぐ　愛媛縣角野町　在間小樓
殘業のかへり玩具屋おきてゐた　同
文學論僕には妻も子もあつた　同
月青く輸血の話きかされる　尼崎　山田南濃路
縛られてゐるとは知らずトンボ飛び　同
鼠にも借家の襖侮ごられ　同

寄與史君入院す

レントゲン寫眞に希望持つて寢る　同
擧げられた閣取引は信心家　松江　小村富也
假名文字に母の慈愛があふれてゐる　同
女にはさつぱり緣がなくて蓄め　同
寢押しするものを疊んで旅馴れる　東京　内田日出美
頻ずりて母たるものゝ全てなり　同
榮轉の嬉しさを兒も連れて訪ひ　岐阜　藤井紫風
奢侈品を持つても行けず靈柩車　同
忙がしい仕事と別な無精髯　岐阜　藤井紫風
第二號今日はモンペで出るところ　同
求婚へフト月給の事に觸れ　布哇　須藤柳村
新學期靴も次男へ拂下げ　同
飾氣のない將軍の底力　同
にぎやかに代用食をつゝき合ひ　大和　鵜田翠峯
出しやばつて養子娘とがん付かれ　龍田町　同
讀み書きが出來て孝行まだ出來ず　同
この秋の出來へ保險を奬められ　島根　田中弘樓
時計なごいらぬ生活を尊がり　同
立腹は沈默と云ふ變りよう　同
嬉しさをうつかり見せた總入齒　岐阜　市川童顏
子があるを流石老妓だ聞きもせず　同
切符制ですと女房のきつい酌　同
野天風呂まわし一つでやつて來る　中支　藤田義雄
鹵獲品山程出來て今日は晴れ　同
大休止鶯鳴いてこゝにした　石川縣　勝山しとし
松並木下に下にと云ふ如く　小松町　同
伸びるより外には能のないほぶら　同
馘にしておいてそれからほめる事　同

藥水場の風景

藥水バカチ大きく美人飲みこほし　朝鮮　松田幸士
イナビカリ藥水湧く音も怖くなる　同

煙草飢饉

シヤベルの余得煙草で頑けて下れ　同
管制に國を離れて氷水　大牟田　高田抱逸
質屋から木綿着買うも嗤へない　同
二十歳にて盲母と姉のある重荷　同
サーカスの駱駝がお婆さんに似て　松江　溝口及史
秋の宵表紙のされた本も出し　同
星一つ二つ程よい風呂加減　同
忠告隊やつぱり渡すことに決め　廣島　得能紫浪
電髮のつけられてゐる氣配なり　同
憂き事の皆無か兵士の顏の艶　同
只西へ西へと秋の雲早し　廣島　大山露斗
四十へこぎつけにけり秋の風　同
子供が多したたみでこほこ　同
競賣へ女子供は遠くまき　兵庫縣室津港　木村染史
波にゆれビールに醉ふたことにされ　同

北回歸線附近

黃昏を急ぐお遍路肩細し　松山　宮内耕朗
朝顏の庭にいだきし子の匂ひ　同
字の先生講釋へ計り力いれ　大阪　堀毛一龜
子の愛に女給となつた強さ持ち　同

舊盆にかへりて(二句)

谷川の水淸らかに不平なし　大阪　中西彌生
今日も又日課としての風呂をたき　同
天保山へ來て齒磨をわすれたり　大阪　今西鼓愁
詰襟の襟は喫茶の隅へくる　同
潮風へいつそ此の身を捨てましよか　同

東三病院

不具なれど國に捧げたこの誇　神奈川縣　尾崎綠柳
現實に取つ組んで行こあまへずに　同
女店員我が家の壁へ暗くゐる　尼崎　奥田綠翠
湯上りの素足も嬉し靑疊　同
平凡が見込まれて居る二代樣　堺　野島神樂
顏上げるために毆つて刑務所へ　同
耳遠し墓守でゐてまだ達者　張家口　澤柳翠
憎めごも子の生れきし女也　同

我家の新體制

今日からは號令一下の戸主となり　松本　西藤義春
七・七も知らずに妻は死んでゆき　同
一人待つに餘りに廣い應接間　尼崎　小林文月
うまく行く豫感ありこの應接間　同
叱言かと思へぬ程の笑顏で來　廣島　吉澤天國
遲參した朝親友の計報聞く　同
何事を祈るか蠅が手を合せ　布施　小谷華素兒
氣位が高く看護婦老けてゐる　同
姑娘が日本語で來る移民村　新京　中村對州坊

青少年義勇軍內原訓練所にて

松の木の彼方に小さく日輪舍　神戸　新間透水
働きに出ますと可愛い事を云ひ　名古屋　松井靜子
召され行く笑顏でのぞく汽車の窓　下關　竹田正晴
爆音へしばし打水手をやすめ　大阪　青野花笑
一升瓶すゝいだ水も捨てがたし　堺　野島夢女
代用食おやつを貰つた氣になりて　滿洲四平街　尼崎　矢野是郎
赤子でも夢のお國は有るらしい　同　高添君代
奥樣の電話へ課長早く去に　兵庫縣長野縣　岩崎水虹
あばかれるのを待つ匿名寄附行爲　上田　佐二木千隈

▼大森風來子氏(廣島)は八月廿八日、久米雄、心太樓、紫浪、田鶴子の諸氏と體位向上を兼ね吟行をされ、又九月十五日の「川柳とは?の會」へ石原伯峯氏同伴來阪された。

▼植山九天氏(長崎)は「川柳とは?の會」出席のため九月十四日來阪、午後、喜山、某人兩氏の案內で川柳雜誌社へ來訪された。

▼石曾根民郎氏(松本)は橿原神宮參拜後、廿三日來阪、不朽洞へ來訪される豫定であつたが一行中に病人が出來たため、橋本綠雨氏に迎送され僅に大阪の地を踏んだだけで直ちに歸松された。

▼飯尾寄興史氏(尼崎)は西宮で靜養されてゐたが再度住友病院へ入院。更に播州へ轉地療養されることとなつた。

▼野島夢女さん(堺)八月下旬阪大病院へ入院。

▼米本貴志子さん(大阪府)九月中旬阪大病院へ入院。

▼橋本波夢造氏(堺)今春來東上、小川病院で加療中であつたが十月末には歸堺される由。

▼橋本言也氏(京城)は法事のため福井縣へ歸鄉の途、九月十八日川柳雜誌社訪問。路郎主幹と歡談一時間にして辭去された。

弔

▼戸倉音天氏の嚴父勝藏氏が九月三日七十八歳で永眠された。謹んで悼む。

轉居

▼奥村丹路氏は兵庫縣武庫郡阪急沿線武庫之莊住宅二二四號へ

▲大西洋氏は大阪市住吉區濱口町四四六大日本產業株式會社へ

改號

☆本田靜江さん(岡山)はペンネームをユリエとされた。

正誤

前號一四頁下段十八行目
浴衣掛一寸いてくる旅なりし
同二〇頁下段九行目
みなすつと立つ葱畑に落着かう

★社告

▼支部の異動

○尼崎支部(幹事酒井美知夫氏)

○九三會支部(大阪)を解消

▼中支戰線から歸還後、本社編輯部に勤務されてゐた北幹夫氏は漫畫に專念するため圓滿退社された。

▼川柳とは?の會開催に際しては時節柄でもあり、お祝品等は一切拜辭することとしたが左記の方々から、皇紀二千六百年の奉祝と弊誌の創刊二〇〇號を祝して淨財の御寄贈があつた。格別の御厚意を謹んで拜謝する。

金一封(高橋かほる氏)川雜二〇〇號を川柳とは?の會の宣傳用として三〇〇部(松坂倶部川柳講座有志諸氏)金一封(大阪形水氏)金一封(水谷鮎美氏)金一封(酒井斗風氏)金一封(大島濤明氏)句箋(田中風葉氏)金一封(橋本言也氏)金一封(杉原大研子)(好崎申仙氏)(淸水白柳氏)金一封(庄万よし氏)

水虫 新治療劑
セイロポン
ミシクミ ツムラ ハイシンラ タキク ケンモサシ
痒し痛し セイロポンで 掃し
大阪市東區野平町一
發賣元 白井松新藥部
振替大阪六六四八番

皇紀二千六百年奉祝
川柳雜誌二百號記念　**川柳とは？の會**

日時　昭和十五年九月十五日午後一時――五時
場所　大阪三越八階ホール

司會　田中風葉
挨拶　皇居遥拜・皇軍將士と英靈に感謝の黙禱　西田艸樂
詠史川柳と時事吟　戸田孤篷
題詠吟と雜吟　北川春巢
戰線川柳と作句のコツ　岡田某人
川柳詩論と作家の態度　高鷲亞鈍
川柳のこゝろ　伊志田孝三郎

實演　**句會の縱斷面**　實演解説　水谷鮎美
初代川柳と柳樽　堀口塊人
古川柳研究の仕方　森東魚
川柳の形態と用語　麻生路郎
兼題發表・閉會の辭・役員記念撮影

聖戰下新川柳のために叫ぶ
巨豪陣營

主催　**川柳雜誌社**

皇紀二千六百年！一億の同胞擧げて佳年を壽ぎ奉る秋、あたかも川柳報國を念願とする川柳雜誌が九月號を以つて創刊二百號を世に送つた。この二重の悅びを我等川柳人のみの悅びとなさず遍く世人にも頒ち、而もよりよき新川柳の社會化を目指して、廣く大衆の川柳再認識を促す爲に、大大阪の中心地帶、こゝ三越の八階ホールに於て「川柳とは？の會」を開催した。

開會のベル鳴り響くや司會者田中風葉氏、頗ぶる明快なる言葉を以つて本日の意義ある會の主旨を述べ、心からなる悅びを滿へて參會者を歡迎し次いで氏の發聲によつて東方宮城を遙拜し、續いて皇軍將士の武運長久と戰歿英靈に對し衷心默禱を捧げ、後、西田艸樂氏の登壇をうながした。

路郎主幹の傘下にあつて重きをなす

西田艸樂氏　は我が「川柳雜誌」が川柳の社會化を提唱し大正十三年二月、創刊せられてより十有七年の今日に至る歷史を語ると共に、「川柳雜誌」二百號は單なる蓄積にあらざる所以を縷々詳述、その間路郎主幹の不屈不撓、よく今日の光輝ある社運の隆昌を招來せしめられた大功を感謝して降壇。續いて講演のトップを承る

戸田孤篷氏　堂々たる體軀を壇上に運び、〃大昔マッチなんかはなかつたよ〃の時事吟より說きおこして人間の五官は勿論、高等數學や想像の世界迄も川柳に作れる事を力說し、今は氏のものとした詠史川柳に就き例句を擧げて後「時事吟が後世詠史川柳として編まれる」可き事を指摘し、「詠史川柳の態度としては正史を經とし文學的想像を緯とすべきものである」と語り、斯くてこそ「詠史川柳に意義がある」と結んで拍手裡に降壇。第二陣としては

北川春巢氏　「題詠吟と雜吟」を克明に比較解剖し、「雜吟が本來、川柳の目的であり、題詠吟はそれ迄の過程としての練習的なものである」と力說する。第三陣は社中健吟を以て鳴る

岡田某人氏　登壇、先づ「作句のコツ」に就いて、氏の體驗より、箇條的明確さを以つて說き、何を目的とするかを見きわめて、見た事、感じた事を正直に、素直に述べる事、餘分の事を云はない事、効果を擧げる爲に、文字言葉を正しく撰ぶ事、言葉や文字の面白味、口調のよさに釣込まれず、心で作る事、邪心野心を去る事等々を述べ、これが例証句として戰線川柳を懇說に評釋、代つて柳論家

高鷲亞鈍氏　は詩と云ふ字は言葉扁に寺と書く、故に詩は言葉の宗教であると口を切り、俳句は詩を對象にする觀賞の立場であり、川柳は詩を內容に持つ體驗の立場であると述べ、故に川柳自體は詩ではなく散文であつて、川柳が詩である爲には川柳人は詩性を意識し發見すること即ち詩的精神を持つ事によつて川柳は詩になり得ると川柳に對する作家の態度を指摘して後、從來の本格川柳と詩的精神による川柳を區別し、本格川柳を散文川柳、詩的精神により川柳を詩川柳と銘名したいと結ぶ。次に本會のためわざ〳〵名古屋より來援された

伊志田孝三郎氏　洒脫輕妙、亞鈍氏の重厚的な感じに對し凡そ對照的である。〃何をくよ〳〵川端柳〃と都々逸から初代川柳の雅名の由緣を語り、「終りに川柳する事によつて悅びを感じてゐる私は、今後も、このよろこびの心を持ちつゞけてゆきたいと思つてゐると述べて降壇。

★この間實演準備のため五分間休憩★

實演「句會の縱斷面」の解說者

水谷鮎美氏　幕外に立つておもむろに口を開いた。「皆さんのうちには句會へ行くといふことをよく聞くが、一體句會とはどんなことをするものか、どんな方法で行はれるか、どんな氣分を發散するものか、御存じのない方がゐらつしやると思ひますので、これから社中の健吟家たちによつて實演をして御覽に入れますから皆さんも共に和

川柳會とは？の句報

★天位入賞・孤篷・風來子・柳秀★

兼題　〃二千六百年奉祝吟〃

麻生路郎選

國史二千六百年で以下餘白　江口正路
いざ異國に居ようとも座を正し　姬田夕鐘
肇國の光東亞に押し進め　米本貴志子
勤勞の土を運んだあたり指し　田中風葉
神苑の霧拍手へ明けかゝり　大西八步
「祝二千六百年」子に手本書かせる　植山九天
二千六百年國史を子等と語り合ひ　米澤曉明
奉祝の心が揃ふ子澤山　福田山雨樓
君ケ代のうたの通りに行く日本　酒井美知夫
二千六百年秋なり嫁のくる日なり　伊藤入仙
紅提灯やめて一億新體制　中島生々庵
跳びかはす蟬二千六百年の秋　阿部閑生
奢侈禁止これも皇紀二千六百年　長崎柳秀
克く忠に克く孝に二千六百年　高木滿山
二千六百年丸刈も賴母しく　岡田龍子
二千六百年皇太子樣御入學　鈴木可香
尊像へ菊奉り澄む心　前田五健
(人)日章旗伏家の庇ひくけれど　魚住滿潮
(地)富士山頂に登り給ふ二千六百年　大森風來子
(天)さあ右へならへ二千六百年　戸田孤篷

兼題　〃部隊長〃

橋本綠雨選

部隊長部下の遺族へ筆をとり　山本葉光
部隊長ふとふるさとの子を憶ひ　鈴木誠一
ぶきような手で花を摘む部隊長　前田五健
達筆を墓標へ殘す部隊長　奧田綠翠
御苦勞の外は云はない部隊長　酒井美知夫
部隊長地圖へ大きくうなづいて　桑原春珠
突擊の眞つ先に立つ部隊長　高木滿山
部隊長明日の宣撫を考へる　清水史路
英靈へ生けるが如く部隊長　米澤曉明
部隊長かたじけなさに恐懼して　鈴木可香
鉛筆の芯が足りない部隊長　岡田某人
部隊長東を拜んでから出かけ　植山九天

かな句會の氣分にひたつて戴きたい」といふ言葉につれて幕は左右に開かれる。正面には金屏風、中央に披講台、背後に初代川柳翁の掛軸、上手に松の盆栽、下手よりに受付机程よく配置され、總て照明により秋の夜の感じを出す。次いで各作家登場、句會を實演中兼題、席題、互選の方法、頂戴の聲等々々初心者の未知の世界に對して解説が行はれ、川柳の會が虛飾を去つた如何にも和やかな會であることを眼から耳から訴へた。この實演では、「父」と云ふ席題が出されたが、壇上作句時間中は觀衆席でも同じ題で作句し、これ等の句は散會の時、投句函に投入、誌上發表の仕組であつた。

舞台吟　父　互選

破談聞く父は眼鏡を拭いてゐる　風葉
身に合はぬ浴衣で父と旅にゐる　九天
父そつと子の體温に觸れて見る　潮花
又何か夜店歸りの父は提げ　紫香
うか〳〵と何時の間にやら父となり　翠芳
つとめからかへれば父になつてあり　梅子
結納の今宵父親すこし醉ひ　久枝
落魄の父の寫眞が見當らず　水客
父と來て素通りをする街となり　小松園
若後家で歸つて父にさからはず　孤蓬
軍刀も磨いて父の日曜日　白峯
醉へば父丹下左膳の眞似もして　八九満
見送りに後ろ姿となる父よ　かほる
父といふ名が恥かしい二十頃　豆秋
金で濟むことならと父親ほつとする　潮
刑事室父は頭を下げて呉れ　同

觀衆席吟　路郎選

北濱に任せ切れずに父出掛け　七歩
父にたのめば沓下大きすぎ　すゝむ
お父さんに頼めと母は受付けず　白面人
父さんのちゝくまで來る紙芝居　花笑
銃眼にふと父の顔母の顔　入仙
何もかも知つてる父の眼をおそれ　緑翠
金策の父と知らずにじやれかゝり　柳秀
養子のぐちへ父親さからはず　鼓愁
涙ぐむ父とは知らず逆うて　柳笑
金策の父は古本持つて出る　水虹
母の言ふ程に思へぬ父弱氣　桃園
無慾なる父を齒がゆく思ふなり　已之介
錢湯から極樂さうに父戻る　青笠
云ひ足らぬ口許父の息を引き　獨星
晩酌のまづさは父の無口なる　一笑
貯金帳父と子矢張り氣が合はず　安靜
父と來て勝手のちがふ新世界　わかな

實演は、出席されたすべての川柳人にとつても興趣の深いものがあつた。實演が終ると再び、講演に移り、昭和川柳社主幹

堀口塊人氏　は「柄井川柳と柳樽」と題し、柄井川柳選句になる柳樽が玉石同架の句集であると非難される一方、柳界のバイブルとも云はれてゐる所以のものは、斯かる佳吟があり、かかる低調な狂句や野卑な句があるがためであると例句を上げて説明し、その特徴を列擧して要するに他の詩に見られぬ平民の生活詩であり、あたりまへの生活の中に、あたりまへの俗語で詩が生れるといふことを示した柳樽は世界文學史上稀に見る貴重な書であると結ばれて降壇。次いで古川柳研究家

森　東魚氏　登壇、古川柳研究は緣の下の力持的なじみな仕事である。然し昨今は種々の方面からその必要を感じ、吾々の仕事も漸く世に出る事になつたことを悅んでゐるのであると語つて後古川柳の中の難解の語を旅行中に不圖その地方語の中から見出し得た事等を例句をひいて古川柳の興味深きものを感じさせ、終りに古川柳の研究は常に各種の本を讀み、あらゆる事に通じてゐなければならないとこの研究の甚だ容易でない事を説いて降壇。

最後に

麻生路郎氏　は講演に先だち、本日の盛會を歡び、各位の來援を感謝し、引續き平易な口調で「川柳の形態と用語」に就いて縷述された。ものの形態と云ふものは、その素材の集積された一箇の形現であるから、その形態は決して無意味に出來上つたものではない。近時形態を無視しすぎると思ふので、少しく形態の話をして見たいと、例を擧げて、その素材を語り、素材の新鮮さ明朗さは形態の飛躍を見せるものであることを解説、用語はこの形態を如何に意義づけるかの素材の重要なものであることを述べられた。新らしい指導的な講演で寧ろ川柳人を稗益するものであつたが閉會時間が切迫したのでグン〳〵端折つて話されたのは遺憾であつた。

次いで兼題「二千六百年奉祝吟」麻生路郎選、「部隊長」橋本綠雨選、「節米」水谷鮎美選の披講に移つた。

惟ふに今回の川柳とは？の大會は、前例なき試みであつたが、頗ぶる內容の充實した會合であつたといふ好評を以て酬ひられたことは一つに、長時間、演壇上の人々は勿論、聽衆の靜肅、緊張による賜として主催者側は感激してゐる。閉會午後五時半、意義ある會は遂に終つた。最後に當日祝電を寄せられた方々の芳名を左に掲げて感謝の意を表する。

松山前田五健氏・京都藤本蘭花氏・東京福田山雨樓氏・朝鮮蛭子省二氏・大阪近江砂人氏・大阪戸倉普天氏・ハワイ一浪氏・風竹氏・麗花麗氏・德島姫田夕鐘氏・張家口岩崎柳路氏

（到著順）

寫眞は向つて右より　第一列　塊人・霞乃・路郎・孝三郎・東魚　▲第二列　白柳子・小松園・史風・かほる・綠雨・白峯　▲第三列　風來・某人・九天・翠芳・鮎美・卿樂　▲第四列　綠翠・友帆・風來子・アート　▲立席　潮花・滿潮・孤蓬・鼓愁・紫香・雪原・花笑・秀湊・自由朗・豆秋・大研子・申仙の諸氏

交驩の晩餐　川柳とは？の會が終つてから、遠來の柳友を迎へて交驩の晩餐を城南支部の大研子、申仙、白柳子氏等の斡旋で太融寺の魚庄で開く。主客二十六名、路郎夫妻、孝三郎、東魚、塊人、綠雨、かほる、白峯、翠芳、自由朗、孤蓬、某人、亞鈍、九天、風來子、卿樂、鮎美、風葉、紫香、潮花、滿潮、友帆、小松園、大研子、申仙、白柳子の諸氏。

——記事係・銃人——

（人）受話器をかたく握つた部隊長　宮岡　白峯
（地）戰死した數忘られぬ部隊長　北川　春巢
（天）部隊長軍旗の位置をたしかめる　大森風來子

兼題　〃節　米〃　水谷鮎美選

英靈にたゝえ悔なき芋の飯　米本貴志子
大臣の節米を學校で聞いて來る　姫田　夕鐘
メニューから節米になるものを撰り　須崎　豆秋
節米料理原料をあてさゝれ　北川　春巢
病人も節米と云ふ音を聞き　大森風來子
節米にいつか子が馴れ親が馴れ　前田　五健
節米へます〳〵肥えてくる惱み　正本　水客
節米の中にねずみもふえてゆき　酒井美知夫
節米に興亞を誓ふ氣が溢れ　鳥居　柳笑
節米を眞面目に聞いて共稼ぎ　伊藤　入仙
節米は拜んで食べる事と知り　中島生々庵
節米へ一粒ひかる水道端　朝野　久人
節米へなんの不平もない銃後　西野みづほ
（佳）節米へ茶碗が少しかけてゐる　江口　正路
（同）節米と別に瑞穗の國の秋　大西　八歩
（同）節米をしても母乳の迸る　高橋かほる
（同）節米はパン屋の前に立たされる　水谷　竹莊
（同）子心に節米と知る箸を置き　鈴木　誠一
（人）節米はしても同んなじ力瘤　福田山雨樓
（地）佛さま代用食もあがられる　黑川　紫香
（天）節米で濟む日本のありがたさ　長崎　柳秀
（軸）母ひとり節米の掌のやわらかき　水谷　鮎美

狸

前田五健

淨願寺の先代方丈さんが或夜厠へ行き手を洗ひ乍ら滿天の星に明日も有難いお天氣さまだ、南無と……云ひつゝヒョイと耳に入つたのは誰れやら、シクシク泣いて居るらしい聲である。「ハテ此の夜更けに……」誰れであらふ、兎に角本堂の裏らしいので、コツソリ廊下傳ひに廻つて行くと本堂の裏側高い緣の下で、シクシク泣いて居る。

「これ誰れじやな、其所で泣いて居るのは」

「アッ禿じやないか、一體どうしたのだ」

これから禿の物語るところによると、犬に追はれた禿が逃げ損つて溝へ落ち既に此の世へ左樣ならをする時に、附近の御隱居さんに助けられた。禿は此の恩は八疊敷よりも廣く、寒中修行に登る富士山よりも高いと常に忘れずに居たところ、人間世界には、やゝこしい波やら風が吹き此の御隱居一族も沒落の線を辿り家財を賣る次第と成つた。之れを聞いた禿さんは御恩返へしは此の時なりと豫ねて聞く大槌、小槌島の海底にある沈沒船の中から寶物を拾ひ上げてお助けせんと禿は決心したものです。屋島山頂から西を觀ると高松沖の桃太郎傳說で知られた男木島、女木島、其の向ふに崇德天皇の御陵のある白峰山の鼻が海へ突き出て居るところ、握飯に似た二つの島が在る、これが大槌、小槌島で、大判、小判其他寶物は此の海底に沈んで居るのです。高松專賣局の附近に在る金刀比羅さんを祀る小社に白き大蛇が錨を咬き、潛水夫が逃げて居る額が揚げてあつたさうなが、此の白大蛇の住むと云ひ傳へられ、崇德天皇が經文を大甕に入れて八大龍王に祈り沈めたと云ふ神祕傳說の海です。海と狸、餘程困つた難作業であるが一生懸命、或時は石を抱いて飛び込み、河豚と兄弟分になりさらに腹一杯潮水を飲み、クタクタに成つて、一つ二つ、と拾ひ、ソツト御隱居へ屆ける、それでも、まだ足らぬので、家寶茶釜に化けて買はれて行き、火焙りに成つて火傷した、その痛みと、苦るしさに泣いて居ると云ふ樣な譯を方丈さんに話した。

「成程ッ狸。尊からず其の行や尊し」

豫ねて聞いては居たが、おまへ達が費ふ金錢は、此のまゝ捨てゝ置けば世に出ぬ、埋まり捨てられた寶を拾つて、再びお役に立て世の爲めに再活すると承つて居たが、いやよく判つた。感心の至りじや、泣くのでない泣いちゃ鴉に笑はれるぞい。と御本尊に供へてあつた「おかざり」つまり小さい餅を三つ程與へた、禿さんはこの小餅で泣くのを止めた。これが、此の高松地方の俚謠にある。

「いま泣いたん、たれかいな、淨願寺の禿狸、おかざり三つで、なほつた」

の唄のわけで御座る、先年映畫に「初戀」とか云つて此の高松を背景にしたものがあり、その中で岡本藥店の主人が祭禮から醉つて歸り、この唄を何度もやるのを御存じでせう、又、同職の蓮井さんが童話としてBKから放送されたのも、此の唄のわけです。今は紙芝居にして、禿が海中へ飛び込むところなど動く樣になつて居ます。さあ約二時間位かゝりませう御覽になりますか……時間が無い……それは誠に惜しい事で、何なら、道後の狸祭の時、御送り致しませうか。

方丈さんの禿物語は、なかなかつきさうでない、禿狸が炎天、など自然が人間に天狗とか河童とか、仙人、神佛、など觀念を形象化せしめ、或人は怪異とし或人は哲學的に又魔術的に轉化してその深遠さ、情味美趣、などを愛するのはイ、事であり生活上の光る霑ひであると私は考へさせられた大きな淨願寺の三層樓門を仰ぎ、白禿大明神に別れの禮拜をして次きの狸傳說へ私の歩みは進む。

（つゞく）

點師と成つて、近鄕近在を廻つた話、紫衣をつけ馬上で金刀比羅詣りの話、等々禿の傳說は一册の本にでも成る程だと、方丈さんは、御自分の頭をツルリと撫でた。

文明の進展につれて總てが合理的に解釋、解決され科學的の說明がつかぬものは存在が忘れられ消て行く、私はお伽話や、傳說や靈驗記もこんな傾向で薄れて行くので無いかと怖ろしい氣やら寂しく悲しくも思ふ、大自然を守らす爲、神佛を敬拜させる爲昔の人々が詩情豊かな傳說や信仰で、むつかしい法律は無くとも「道德」を敎へて行つた智力に心から敬意を表したい。

大樹、大湖沼、深山、蒼海、

川協のページ

通信歡迎

★軍用動物慰靈供養

九月二十一、二、三の三日間、虫供養萬燈會主催の軍用動物慰靈供養が箕面で開催され川柳雜誌社でも協贊し路郎、葭乃、白柳子、孤蓬、紫香、水客、潮花、滿潮氏等が出句して其の擧を盛んにした。

☆臺灣川柳社で九月廿三日夜、台灣新報社講堂で川柳忌修營。

☆小川靜觀堂氏(海拉爾)は公務多忙の由であるが八月の下旬にハイラルの曉方頃は六度だそうだ。氣候の上の勞苦だけでも我々は同氏に感謝していゝだらう。

☆伊志田孝三郎氏(名古屋)は夫人同伴で九月十五日川柳雜誌社主催の「川柳とは?の會」へ出席のため來阪された。

☆須藤柳村氏(布哇)「私どもの住んでゐる布哇島は有名な火山島でありますが昨年十一月頃から約二十五年以來の旱魃で地方によつては一バケツ五十仙位の事もありましたが、八月上旬から大降雨となり先週金曜日にはコンクリート橋が押し流されたり電氣柱が倒れ電氣不通となり雷が落ちて、少しではあるが處々に被害があり、一時はどうなる事かと心配してゐました。幸大したことにもならず押し流された橋も假橋ではあるが今は通行出來るやうになりまして布哇島各地では八月十五日頃各寺で盆供養を營みます。當地でも今晚から盆踊が始まり家內が出て行つた後で東京からの日本語ニュースを聞き只今は岩國オンドのレコードを聞きながらこの通信をしたためました」云々。

☆森東魚氏(豊中)九月上旬、新居濱の出張先から歸社した同氏は席暖まるひまもなく北京へ出張を命ぜられ家族を從前のやうに豊中に殘して九月廿六日大阪驛發で鐵路赴任されることとなつた。なほ、同氏送別會は時間の都合上廿五日夜、江戸堀の鳥菊で麻生路郎、脇田無名子、高鷲亞鈍、永田里十九氏の四名で乾盃。

☆辻京二氏(京都)は二百二十日の厄日らしい風の玄海を横ぎつて渡鮮されたと京城から通信に接した。

☆長野文庫氏(今治)は今治商工會議所主催の修養道場に參加、九月廿一日、佐禮山仙遊寺から「俗塵を避けて魂入れ替へる」の句を寄せられた。

☆阿萬萬的、都路紅多呂兩氏は九月六日伯耆大山に遊び、そのままの姿で七日夜の本社句會に出席。

☆長良川から孝三郎、誠、星文洞三氏の寄せ書。

☆池田可宵氏(仁川)は京都から八日か九日に來阪されの通知に接したので、葭乃が日曜を出社して待つたが多忙のため大阪に立寄らず歸鮮された。

日獨伊同盟祝賀句會

★日時　十月五日夜六時(土)
★會場　御津八幡宮(電話南八六四〇)
南區八幡町佐野屋橋筋角(木棉橋電停下車東一丁・八幡町市バス停西一丁)
★兼題　「同盟」(三句)……須崎豆秋選
(前月句會の句中より)……水谷鮎美
★講評　「新體制下の川柳」……麻生路郎
★柳話　三〇錢(川協章提示の方は二五錢)
★會費　天位(各題)に粗品贈る
★呈賞　潮花・小松園・紫香・鼓愁・里十九
幹事

主催　川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二ノ四六(昭和ビル)
電土佐堀三三三三・八一六三・八一六四番

岩佐醫學博士寓驗創製
新強力發毛劑

◎ウス毛、ハゲ、ヌケ毛ハ毛芽デ全ク解消!!
◎毛芽ハ老若ヲ問ハズ毛根アル所必ズ毛生セシム!!
◎今發毛ノ最適季節養毛ト毛根刺激ト深遠性ノ三大條件ヲ完全ニ具備シ多年ノ研究ト實驗ニヨリ完成セル毛芽ノ適用ヲ是非御勸メシマス
◎眠レル毛根養ヘバル毛根、榮養不良ノ毛根等々ニ是非毛芽デ活、ト榮養ヲ芯カラ與ヘテ下サイソシテ時局下心身共ニ明朗ニ活躍シテ下サイ
◎今マデ如何樣ナ方法ニモ効果ヲ得サリシ方モ特ニ今一度コノ毛芽ヲ御試用下サイキツト驚クベキ偉効ヲ御認メ下サルデショウ……使用簡便一日一回ノ餘布デ有効充分……

説明書無代進呈　發賣元　大阪府濱寺町舟尾　小川屋本舗
地方藥店、化粧品店、美理容院其他ニテ販賣御希望ノ方ハ御申越下サイ
定價金　參圓五拾錢　(三〇瓦入)　送料　金拾五錢
振替大阪七四四一四番

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

川柳雑誌社主催 川柳忌（大阪）

九月七日　於御津八幡宮

出席者（順不同）
路郎・柳笑・かほる・水虹・孤蓬・征野・正路・一龜・潮花・美知夫・夢裡・滿潮・鼓愁・彌生・綠雨・晃司・宗男・久枝・亘人・紅多呂・万的・雄午・春珠・香林坊・白柳子・小松園・光晴・豆秋・八歩・一笑・紫香・顯・里十九・葭乃・幹夫

席題「片　言」　亘　選

片言が多くなる程愛が出來　雄午
片言のいひなりになる片車　美知夫
片言は母親にだけ良くわかり　彌生
片言で子と子が話す三等車　紫香
片言で振る日の丸がよく目立ち　万的
片言で迎へられてる父若し　久枝
片言へ母はまじめに云ひ聞かせ　潮花
頼もしい片言を聞く赤信　柳笑
片言を云ふ子に夫婦勵まされ　同
片言を母に通譯して貰ふ　春珠

席題「幼稚園」　綠雨選

横むいて唱ふ兒がゐる幼稚園　紫香
先生が一番こはい幼稚園　柳笑
幼稚園どちらの親も迎へに來　滿潮
日の丸がこんなに嬉し幼稚園　雄午
幼稚園辨當喰べるとすぐ歸り　蘇州
泣いた方の無理が通る幼稚園　八歩
先生にお辭儀がしたい幼稚園　滿潮
幼稚園折鶴さげて歸つて來　亘人
幼稚園苗字を呼んで誘ひに來　白柳子
喧嘩してどちらも泣いてる幼稚園　万的
幼稚園名前ぐらひは書けるなり　美知夫
幼稚園今日も貰つた紙細工　孤蓬
（佳）色紙が散る日曜の幼稚園　かほる
ぶらんこに乘る順がある幼稚園　小松園
辨當をおもそうに持つて幼稚園　正路
唯今がはつきり云へる幼稚園　美知夫
幼稚園つまづきそうに走り出し　柳笑

席題「キャンプ」　白柳子選

キャンプもうトランプにあきひる寢する　小松園
常備藥キャンプに馴れて持つて行き　紅多呂
暴風の豫報敵中したキャンプ　滿潮
キャンプ村樂しく唄ふ隣り組　鼓愁
キャンプみな體操してる朝の風　紫香
熟睡をたづねあつてるキャンプ村　春珠
水着等干してキャンプの松並木　紫香
村人へ挨拶も無くキャンプ立ち　水虹
キャンプの灯霧の深さの朝となり　八歩
朝霧の中でハンゴの飯がにえ　一笑
キャンプの娘月の丸さへ誘はれる　潮花
寢つかれぬキャンプ不氣味な音にふれ　柳笑
日の丸高くキャンプの村へ朝が來る　万的
グループの一人は支那にゐるキャンプ　滿潮
蚊を追うて〳〵キャンプへ朝が來る　柳笑
キャンパーの話題下界は夏らしい　雄午
（佳）父ゐる氣強きキャンプよく眠り　柳笑
（軸）山の霧キャンプへ悲劇知らずやう　白柳子

席題「糸　屑」　豆秋選

大丸髷に付いた糸屑　亘人
糸屑をつけて豆腐屋呼びにくる　紫香
座蒲團の糸屑とつて坐るなり　紅多呂
突然の客へ糸屑かたづける　亘人
糸屑の中で讀まれる軍事便　久枝
糸屑を取つてもらうた砂糖の例　美知夫
丸髷の糸屑へ主人の手がとどき　里十九
糸屑は人差指で丸められ　香林坊
糸屑をつけて工場から歸へり　潮花
徹夜した眼が糸屑の嵩となり　小松園
糸屑の捨てるにおいしいほどきもの　一笑
糸屑を拾つて客を出迎へる　紫香
（秀）糸屑がとろゝこぶ程たまるなり　かほる
（軸）糸屑を火鉢へくべて立上り　豆秋

兼題「防　諜」　葭乃選

繩張りを決めてスパイはお茶を飲み　蘇州
風強き日の防諜に必死の眼　鮎美
擧げられたスパイは知つた人だつた　蘇州
防諜へ女としての自肅する　紫香
下駄ばきのスパイが居ると知らなんだ　白柳子
青寫眞電車で忘れ寢つかれず　孤蓬
天地四方みんなスパイと思て良し　雄午
よく喋べる妻に時局をさとすなり　春珠
防諜のうつかり物も捨てられず　一笑
口輕くシュペー號は沈みたり　彌生
觀送に來て防諜を意識する　紅多呂
防諜へ壁の厚さを想ふ夜　八歩
防諜へかゝわりのない卓かこむ　一龜
涙なぞ見せてスパイは語るなり　滿潮
防諜のマスクをかけてゐる無口　彌生
防諜の手づるとなりし吸取紙　小松園
戀に泣く姿にスパイなつて見せ　滿潮
大阪に出張所の有るスパイ　同
軍需工言葉少なに戻るなり　春珠
散髪屋外人がゐてだまつてゐ　正路
防諜をまもる銃後の秋實る　亘人
金持のしばし防諜論を聞き　鮎美
外人がみんなスパイに見へる秋　水稻
云ふ丈はいはせて防諜注告し　桃園
防諜へ座席が固い一人旅　八歩
歸還兵スルリ話をそらしたり　雄午
眼だ耳だ國を賣るなと字幕にし　路郎
一枚の反古へ防諜きつとなり　同

川雑 梅田支部句會（大阪）

故仙波夕人君一周忌　水谷鮎美報

若死へ誰が供へたか赤い花　由布
若死の便りだまつて茶をすゝり　斗風
若死の寂しアルバム繰つて見る　同
若死の父へ手向ける子の草紙　秀峰
若死を聞かされてゐる貰ひ風呂　鮎美
若死の眼鏡は棚へ置いたまゝ　同

川雑 廣島支部句會（廣島）

七月十五日　大森風來子報

夏痩の犬が溜箱探しに來　紫浪
夏痩へ合せてバンドへ穴をあけ　幽香里
夏痩のアイスケーキをつめたがり　久米雄
夏痩の煙草一本づゝ減らし　風來子
指先に物を言はせて紅をとき　三昧
病上りまだふるへてる指を見せ　幽香里
くすり指ふつと男の眼を感じ　伯峯
百圓札器用な指で數へられ　風來子

七月三十一日

月曜のプランが友が來てこわれ　敏子
迷惑を掛けまい無理を笑はれる　濱算子
血緣として迷惑を落語めき　市多樓
迷惑のかけつばなしで支那にゐる　水客
達筆だなどゝ手紙を書かされる　山雨樓
無造作に財布を出していくら要る　敏子
天井を見て無造作に引き受ける　九呂平
無造作に猫捨てに行く下駄をはき　久米雄
無造作にことづけを聞く段梯子　露斗
破産の日女中荷造り出來ており　風來子
未亡人破産のなかに美しい　水客
破産した家へがつちり錠が降り　紫浪
破産ふとはだかで食へる事を知り　露斗
破産とは知らず牛乳屋は配り　春巣
破産しみ〴〵娘の琴を聞き　風來子
新聞にゴシップもあり返り咲く　靜江
新聞のその一隅へ返り咲き　九坡

白粉のつきが淋しい返り咲き　濱算子
返り咲き精力的な艶が増し　伯峯
返り咲きの寫眞は少し胸を張り　春巣
返り咲き明日履く下駄を拭いて置き　市多樓
返り咲き靴磨かれて〳〵　久米雄

雜川　**今治支部句會**（今治）　長野文庫報

九月十一日

豫告篇惜しいところで期待させ　向上庵
手作りの茄子を惜んで轉任し　心府
資源愛護カン〳〵帽も仕舞ておこ　同
嫁ぐ荷に短刀も有り元は武士　文庫
短刀へ十手の群は遠く居る　鬼外
短刀も錆び文身もしなびたり　心府
汽車にしてよかつた窓へ時化の海　向上庵
稻の花天氣豫報は時化とあり　心府
風雲も流石厄日と云ふ動き　敬道
時化模樣行く決心を弛めさせ　文庫
魚屋は明日は休みと定める時化　地下水

雜川　**松江支部句會**（松江）　勝谷山川兒報

九月四日

星二つ三つ四つ空を賑はせ　祥月
赤札の墨繪の軸に立止り　同
事務所まで傘がとゞいた俄雨　莞路
錢湯の一人蘭印知つた顏　同
匿名の便り事務所へとゞくなり　山川兒
夏痩せへ北斗七星美しい　同
騷音の中に默つた事務所なり　柳人
夏やせへトマト眞つ赤にうれてゐる　同
箒星マストの上をかすめたり　都之介
鑛山の事務所朝からのんでゐる　同

雜川　**竹原支部句會**（廣島）　西野みづほ報

九月一日

賣立へ舊家の末路哀れなり　芳郎
庭石の苔に昔を偲ぶのみ　芳泉
どん底の中に系圖を手放さず　みづほ

雜川　**下關支部句會**（下關）　國弘報

出迎に手製モンペの儘で行き　川平
出迎の兒は土產物に氣をつけ　樂運坊
出迎の提灯らしい灯が見える　文福
出迎へ娘のお化粧に念が入り　榮朗
出迎の御が揃つたとこで撮り　半休
出迎に刑務所へ行く義理があり　市多樓
出迎の中に名乘れぬ母もゐる　柳月
出迎の子を抱きあげてから話し　米三
生醉は石段になつて確かなり　つゞる
石段が見えて小供は元氣ぎき　半休
石段を上る斜の足構ゑ　松翁
流行歌向ふ島から渡つてき　文福
荒れて居る沖の小島に灯がともり　山彦
成功の島へ戻つた賑かさ　松翁
御袖火に島は娘と更けてゐる　九呂平
萬歲の聲を殘して戰死した　柳月
交換はしどろもどろにて若い　市多樓
もう寸時ソースかけよと仲のよさ　山彦
腹臟なく意見を交しみな裸　九呂平

雜川　**鐵道病院支部句會**（大阪）　北川春巣報

七月二十日

避暑しても結局同じ二十貫　幽香
清印ははつきり輕井澤で來る　水虹
避暑既にテキがたべたくなつてゐる　某人
仰山な繃帶實は齒の痛み　正枝
繃帶に血を見て急に痛み出し　七月
繃帶をきれいに卷いて返して來　水客
右腕の繃帶口で結んで居　骨減
繃帶を滿艦飾の樣に干し　九官
繃帶の顏飼犬に吠えられる　春巣
新築は鏡台の位置が又變り　久枝
新築の時計かつちり合うて居る　水虹
新築を乞食も覗き込んで行き　春巣
浮足のまゝで新築見せられる　一生
俄雨度胸をきめて走り出し　四郎
俄雨腰落付けて飲んで居る　嘘川
呼び賣りの聲がとぎれてゐる驟雨　某人

雜川　**葉櫻支部句會**（大阪）　丸尾潮花報

八月十四日

向ふにも夜釣がゐてる煙草の灯　風葉
港出る船のあかりを見る夜釣　紫香
おてんばな方がケーブル先に乘り　鼓愁
月見草病室の窓夕陽する　雪原
月見草戀をなくした娘につまれ　迷
夕立の中を奉仕の手もやめず　競舟
蚊柱の露路へ夕立突き當り　綠翠
映畫を出れば夕立のあと　南風
夕立が屋根のトタンへしぶく音　魔花麗
夕立の中を迷ひ子ぬれて行き　美竹
噂する所へ彼女つんと來る　みのる
惡友の噂のなかへ遲れて來　水客
戲らな噂へ女工一人やめ　潮花

雜川　**四ツ橋支部句會**（大阪）　中內翠芳報

八月十二日

ラヂオ屋の小供も來てる夏休み　白峯
夏休み思ひ〳〵の夏は過ぎ　秀甫
海と山早くも過ぎた夏休み　山人
キャンプから手紙を出した夏休み　綠雨
水泳に焦げてる程を自慢にし　朗舟
赤い帽後に男が泳いで來　榮峯
水泳を覺えて海が親しまれ　靜峯
嫁も子も裸で遊ぶ水泳場　寺田
水泳の選手だらう黑い人　德磨
水泳の彼方に高く雲の峯　防風
水泳を止めさせられた秀才兒　美奈子
浮持つた弟を沖から呼びに來る　秀甫
水泳も敵前渡河で習つて來　山人
水泳に親父淺瀨へ置いとから　翠芳

雜川　**塗青支部句會**（大阪）　淺謙公報

八月二十日

轉地した隣りも輕い咳の聲　謙公
寢よと云ふ積りか母の咳一つ　博行
咳一咳次の文句を考へる　子元
あす〳〵と祖父の墓に足遠く　月草
お母さん妾しですよと墓の前　謙公
蠅參り母はお詫びを並べ立て　香林坊
ダイビング太平洋の一端へ　同
夕波へ泳ぎ足りない子が殘り　光路
元氣さに阪の車へ腕を貸し　久
力こぶ出して元氣な夏を知り　博行
教壇へ朝の元氣な手が揃ひ　光路

雜川　**布哇支部句會**（ホノルル）　於岩崎山石居　前山北海報

七月廿三日

頭だけちらり水平線の富士　一浪
水の音芭蕉時代のそのまんま　同
四疊半盃洗などは水臭い　風竹
水飲んで忘れた文句取戻し　北海
水くさいなどと阿呆を嬉ばせ　魔花麗
水劃つて國策と云ふ策で御座候　山石
水に流した筈の話でもめてゐる　友郎
悲噴家の父水涕を啜り上げ　同
蹴つた石水のネオンの字をくづし　草一郎
激浪も神秘の池も水だがなあ　伯樂
水膏した妻人中で撮つて見る　木公
姉妹の喧嘩水掛論ですみ　柳村
あれまでの愛も意見も水の泡　長洲
ランデブに鯉が邪魔する水鏡　沙兆
泣けてくる船路に無情水と空　落水
背水の妓には閣下も旗を卷き　晴耕
水くさい話はよせよ子もあるに　松籟
水呑みと言はれて今日の立志傳　白郎
妾等の夫婦水など洩れませぬ　はる女
罪の子の母を助產婦慰める　一浪
助產婦の夫で野心だけはあり　風竹
助產婦はもう生むことにして賴み　北海
備忘錄產婆の電話など書いて　同
子澤山產婆の役も一通り　山石
助產婦の慣れた手つきも賴らるゝ　友郎
助產婦に亭主關白使はれる　光川
時の人產婆我が子の樣に譽め　草一郎
助產婦は避姙の方も心得て　伯樂
夫亡き後產婆學身を助け　木公
おかしさは產婆の腹のふくれやう　落水
糸屑を取つてお出掛けなされませ　草一郎
口まめな母に達者な絲切齒　光川

松坂倶樂部句會（大阪）　石井白面人報

八月四日

信心は母にまかせて一家無事　白面人
先生に內緒で祈禱續けてゐる　同
信心をしても債券あたらない　同
ヒツトラー禮拜堂の前に立ち　孤蓬
幕府よりデウスのおきて恐ろしく　同
末つ娘のキャラメルもおく地藏盆　同
信心の茶店かしわのすきもあり　葭乃
信心の寺は晝寢によいところ　同
信心の一人は默したまゝでゐる　美奈子
信心の目的誰にも明かさない　同
聖戰の父を親子で拜みに來　綠雨
信心に暗い社をぬけるなり　同
信心にあの手この手もあるといふ　美根子
お百度の目に燈明の有難さ　同

月參り水商賣のこつてゐる　普天
信心にまだ算盤を忘れかね　生々庵
お藥もお藥信心もなされませ　同
信心も結局儲かります樣に　同
御信心丈けで人生ごまかす氣　同
脛に傷持つて信心派手な事　同
このたのみ聞かはつたら信心すると云ふ　同
自爆する覺悟で持たぬ落下傘　白面人
落下傘あんなところへ降りちまひ　同
落下傘飛行場へは降りて來ず　美根子
落下傘今は決死のひもを引く　同
前線の飢を救ふに落下傘　孤鋒
電擊戰一席パラシュート賣る　同
ナチス旗をつけて賣れてる落下傘　美奈子
スクリーンの落下傘さへ汗をかき　同
落下傘漫畫の樣にゆけばよし　綠雨
落下傘覺悟は出來て笑つて居　同
敵陣がはつきり見える落下傘　葭乃
落下傘お守札をしかと抱き　同
落下傘敵に見られなさとられな　同
タンポポの包子か落下傘部隊散る　普天
落下傘部隊に箱根の險もなし　同
落下傘で逃げる稽古はせぬ勇士　生々庵
落下傘開かなんだらどないする　同
機を離れ傘まだ開かぬ一瞬よ　孤鋒
タイピストふと飛行機を見上げ　同
町會の告知打つてるタイピスト　同
木石の樣にタイピスト歸る　同
タイピスト重役さんの影になり　同
タイピスト夕陽が背に照りつける　同
タイピスト默つて極秘打ち上げる　美根子
タイピストあれで未亡人と云ふ噂　同
マニキューアの指はおどるよタイピスト　同
ランデブーの電話もかゝるタイピスト　葭乃
腹の立つ日のタイピスト派出な晉　同
タイピストへ割勘とらぬ菓子が來る　同
タイピストに批判されてる平社員　白面人
才少しあつて百姓厭になり　同
おぢいさんに田畑をたのむ赤襷　孤鋒
野良歸り喰べる大根かついでる　同
交叉點百姓さんが叱られる　葭乃
釣革へ百姓さんの手と並び　同
百姓が時事解說をきいてゐる　孤鋒
お百姓をきらつて町へ出たけれど　美根子
百姓もいゝなと思ふ汽車の窓　美奈子
百姓にすまなく通るハイキング　同
百姓でもしてと若樣おほせられ　葭乃
やがてトンネル百姓が小さく見え　同
みな留守の百姓家に目立つ釜　同
百姓をせよと失職もどされる　同
百姓のゆつくり返事書くときめ　同

有恒川柳會（大阪）

八月八日　寺井鋭々報

連立つて謝りに來る子の野球　波夢造
落第の數も知つてる野球ファン　同
ホームラン肩叩かれて水を呑み　同
盜塁は猫背で走るものとされ　同
野球なら俺も出るよといふ課長　羅漢
父性愛花火線香に火傷した　波夢造
父性愛この商賣はワシ限り　同
デパートに父でなければ買へぬもの　羅漢
勘當を口癖にする父性愛　平三
父性愛露路に過ぎたる三輪車　路郎
燒香へ古い親類巾をきゝ　長月
長者の葬あれも親類であつたのか　大澤
金持になつて親類急に殖え　雨月
親類の者と無心の手紙來る　平三
オイコラと言ふても初まらぬ電話口　大澤
電話口出るには出たが口利けず　平三
電話口高か低くかと待つ永さ　五遊
タイピスト噂嬉しく脫字する　波夢造
タイピスト誰か後に立つ感じ　同
のぞいたら案外ヒゲのタイピスト　五遊
タイピスト重役に氣嫌とられけり　同
タイピスト今日も社長の字に困り　鋭々
タイピスト商賣の裏少し知り　同
タイピストとアパートに五年住み　同
繼子にはせぬ氣嬉しい父性愛　波夢造
郷關を棄てゝ繼子に空高し　同
繼子とはチツトも知らずよく甘へ　五遊
をさな兒に太陽の樣な母が來る　同

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報

只今米食ありが目だつて來　山彦
七・七禁令でお店の戸があかず　同
金指輪買ふ地金屋のあらい事　同
モンペイをはけば銃後の組長よ　同
タテ、ヨコ、ヨコ子供の居寢の賴もし　栞
溫泉やアシカのやうな男居る　同
坊や一坊や一きたない坊やなり　同
驛前のランチ時間に念をおし　同
口髭はまだ剃つてない赤襷　春巢
惡友の魅力を日記帳に書き　同
レース手袋產婆の手とは見へぬ　同
冷房に居て女店員のニキビ　同
水撒いて早出の女給軒に待ち　柳秀
好き嫌ひきつぱり云へてまだ獨身　同
妹を呉れと嫌がるのも知らず　同
緣側で夕立を褒め酒をほめ　同
お悔みのうしろはお辭儀だけですむ　同
通せんぼうのやうにコーチアー手を擴げ　路生
重役も一死を誓ふ赤襷　楠水
節米も苦にはならないウドン好き　利生
大學にゐてお灸がとひやかされ　同

中等野球ラヂオ風景

アナウンサーヒツトと〳〵二度叫び　利生
同點になつてラヂオの騷がしさ　同
挾まれて追はれる樣が目に浮び　同
失策で入れた一點ものを云ひ　同
靴の紐結ぶことまで放送し　同
いゝ恰好して居りますとアツパツパ　柳秀
桑の葉をたゝいてバスの行違ひ　栞
ロンドン空襲「大地」の蝗思ひだし　山彦
白痴の娘あてにして居る親があり　春巢
姉さんの見合を白痴のぞきに來　同
白痴とは知らずに遍路道を訊き　同
宮詣り白痴になると思はれず　同
クツシヤミを白痴大きく天へ向け　同
白痴の子親は自首する氣で殺し　同
自轉車の曲乘りもする白痴の子　路生
ノールスさんと白痴呼ばれてゐ　同
白痴にしては目鼻立揃つてゐ　路郎
少し足りぬ位に母言つておき　同
白痴の子袂くわへて立つてゐる　同
白粉をつけて白痴の娘は悲し　柳秀
男とも女ともつかず白痴居る　同
白痴の娘見せてはならぬ所も出し　路生
十八の白痴の春は長閑にて　山彦
マーブルの裸女思わする白痴の娘　同
閉じこめても置きたい思ひ白痴の子　同
相手になれば白痴つばをかけ　路生
蔭口は白痴でもよい金を蓄め　方正
白痴でもあしらふやうな手管なり　同
惡い籤白痴のやうにおし默り　同
白痴とも云へず頭が惡いんです　同
親の眼に白痴とみえず診せまはり　同
白痴美の話ロビーの夜が更ける　水虹
十九の春白痴の笑みの空虛なる　同
白痴美だとけなす術もあり戀敵　同
梳いてやる白痴の髮の黑かりき　同
禍虫と世間で云へと親心　青一路
白痴ぢやと油斷をすればをとなり　一彌
間男を父に告げたは白痴の娘　同
幽靈を捕へて見れば白痴なり　同
白痴哀れありあまる家に生れ來て　路郎
莫迦は莫迦だが哲學もかじり　同
親の二號に惚れる薄ノ口　同
好きは好きだが白痴の連れ子には困り　同

住友親友句會（尼崎）

九月六日　橋本路風報

應接間やうやく椅子の端へかけ　素心
主人上京ほこりが積る應接間　正路
應接間窓にかすかに帆が浮ぶ　和郎
應接間二階の風が降りてくる　南濃路
應接室因果ふくめる役があり　美知夫
高利貸の聲だけしてる應接間　路風
茶話會は代用食に笑ひこけ　丘風
代用食早や賣切の札が出た　加久榮
うどんそば、パンで過した奉公日　御風
脹ぎやかな代用食になれてきた　八櫻
代用食女中主人と同じもの　路風
パンで足りるとサラリーマンが云ふ　菊野
社長なみ俺も牛乳とパンで行こ　覺榮
トースパン三人前は云ひにくし　美知夫

なぎさ句會（大阪）

九月九日　丸尾潮花報

二階借り南京豆のあとを見せ　みのる
テントみなだまつて虫を聞いてゐる　競舟
日光の直射の下を蟻つづく　細泉
病む友の眼へ虫籠をつつてやり　紫月
第一線もう虫の音へ暮れかゝる　美竹
獨り寢る夜をこほろぎが鳴いてゐ　大洋
緣日で籠のまんまの虫を買ひ　愁花
格子と共に老舗がさびれて來　湊万
罪の身を淋しく見つむ鐵格子　雀葉
花嫁と云ふを格子先から見　大森
格子から甘酒を呼ぶ姉藝者　潮花

後記

▼こゝろよき秋、句作の秋。日獨伊三國同盟が成立した。近衛第二次内閣の使命が達成され、東亞新秩序建設に一段楷を劃した譯だ。維新日本の一國民として大いに祝意を表し、我が社では來る十月五日の夜、日獨伊同盟祝賀句會を開催する事とした。（別項廣告參照）

▼前號で表紙を新にしたところが、各方面でその新味を激賞された。逐號内容が充實されてゆくことは、その好評と共に寶れ行きの激增がそれを証明して餘りあるところだ。編輯局は層一層張り切つて、本誌獨自の持味を擴大すべく日夜腐心してゐる。期待を乞ふ。

▼本號も名吟の獲得に、研究に、隨筆に、力の限りを盡した。

▼「都心隨筆」の筆者泉融々氏は鐵道大臣官房養成課長井上萬壽藏氏のペンネーム。氏は多年國際觀光局庶務課長として令名を馳せ、エスペランチストとしても知られてゐる。その才筆縱横を本誌の卷頭に揭げ得ることは大きな欣びである。

▼蛭子省二氏の「小刀鍛治」、戸田孤篷氏は「三十石とそのほか」を執筆された。何れも古句鑑賞の參考資料としてその勞を感謝していゝだらう。

▼川柳とは？の會は三百五十餘人の出席。餘興一つ入れずに、斯うした會が成立しただけでも涙ぐましく欣びを感じた。長崎、廣島、名古屋、福知山、京都方面からわざ〳〵出席された方々もあつた。出席の各位、講演者並びに幹事諸氏の勞と、モ一つ會場であつた三越のホール係其の他の方々の好意を深謝する。（路郎）

花花供生造裝

環籠花花花飾

フロリスト

紅 くれない

大阪市西區京町堀通り三丁目

電話土佐堀五一三〇番

募集

第十七卷 第拾貳號課題

十月廿日締切（十句以内）

咳　黑川紫香選

襷　杉原大研子選

第十八卷 第壹號課題

十一月廿日締切（十句以内）

名　西田艸樂選

藏　奥村丹路選

第十八卷 第貳號課題

十二月廿日締切（十句以内）

圖書館　麻生葭乃選

看護婦　北川春巢選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選

川柳塔　麻生路郎選

同舟近詠

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

價定

一部　金三十錢（稅一錢）

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十五年九月廿五日印刷

昭和十五年十月一日發行

第十七卷　第十號

（毎月一回一日發行）

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）

川柳雜誌社

電話土佐堀（三三三三番）（八一一六三四番）

振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

新證保有は行刊の誌本

る據に法紙聞

社關係の人々（いろは順）

主幹　麻生路郎

賛助員　池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　顯原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員　鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　龜井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　生方敏郎　高尾亮雄　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田雀郎　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員　橘本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　上田耕二　戸倉普天　小畑自由朗　古川風竹　前川北海　古川覺花麗　岩崎山石　藤井友郎　★北山悟郎　水谷鮎美　姫田夕鐘　村松夢裡　市塲沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　松下小柳子　西藤青兒　後岡白峰　尾崎方香附子　小林正舍　布施筑川　北川春巢　西川愁水　内翠芳　中多樓　多田市多　田宗賢次男　大森濱風來子　原史風　正本客　黑川紫香　丸尾潮花　大坂形水　岩橋双虎　岡田某人　岩崎杉原大研子　田中雨松代　平佐三月　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　増元翠陽　酒井斗風　天野ト居　清水白柳子　北川不水　櫻田原銃風葉人　多田一波　西尾栗彦　關根山

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし　竹原支部（廣島）芳郎　函館支部（函館）晨修　廣島支部（廣島）風來子　梅田支部（大阪）鮎美　名古屋支部（名古屋）水車　簸川支部（島根）綠之助　豊中支部（豊中）紫香　鳥取支部（鳥取）鐵州　下關支部（下關）半休　松山支部（松山）虻之麿　北鮮支部（清津府）美笑　天王寺支部（大阪）八九滿　蒙彊支部（張家口）柳路　鶴町支部（大阪）双虎　上海支部（中華）天作　御池橋支部（大阪）いわを　鐵道病院支部（大阪）春巢　松江支部（松江）山川兒　葉櫻支部（大阪）秀溪　大鐵局支部（大阪）水客　四ツ橋支部（大阪）翠芳　西條支部（愛媛）英賀夫　布哇支部（布哇）蘭花麗　城南支部（大阪）申仙　堺支部（堺）銃人　今治支部（今治）文庫　岡山支部（岡山）九坡　光笑會（大阪）里十九　尼崎支部（尼崎）美知夫

賣捌書店

（大阪）參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店

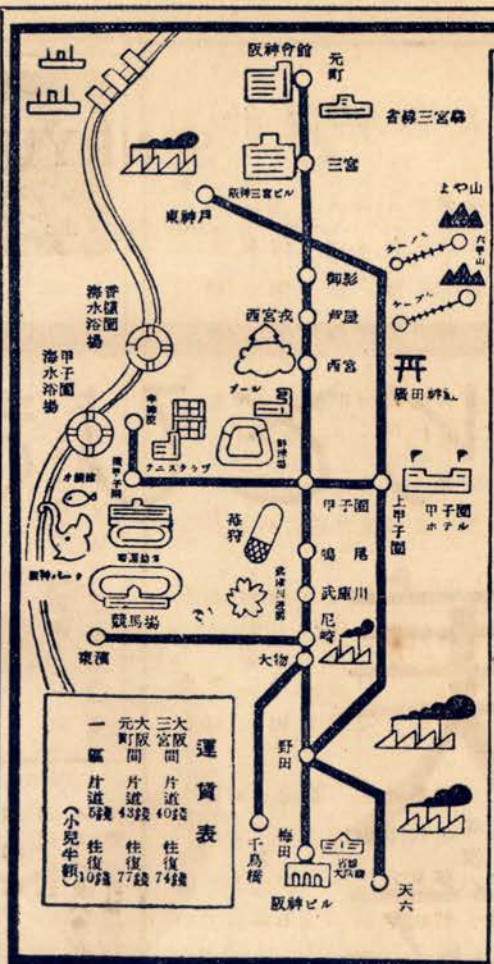
其他　市内　各書店　（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店

石塚（京都）三宅　（名古屋）靜觀堂　玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）

大阪市の交通中心點より
神戸市の中央、元町まで

またずにのれる 阪神電車で

特急運轉 午前五時より
午前零時まで 頻發



阪神電車

金屬代用罐
食品用紙容器
アイスクリーム用紙器
製造輸出

二葉屋商店

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
電話 事務所用 天下茶屋四一〇四番
工場專用 天下茶屋四三〇二番
振替口座大阪九七〇四四番
郵便私書函大阪天下茶屋局一八番

あ産のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀨醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

楢林醫學博士 推奬
片瀨醫學博士 監査

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

菊正宗

株式會社 本嘉納商店

大正十三年二月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年九月廿五日印刷納本　昭和十五年十月一日發行

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

ニキビ

りとびきに

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸したい藥です！

▲定價一瓶四十貳錢・六十參錢・一圓廿五錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物にゼヒ此藥

5—53

美顔水 化粧用

アブラ顔のお化粧下に最適！

川柳雜誌　NO・201　定價金30錢　送料壹錢